シンポジウム特集

立命館大学社会システム研究所
2022年度公開学術シンポジウム

香港・台湾の来し方と〈私〉たちの行く末

テーマ1

鄭成功の描かれ方―1852年平戸，1930年台北，そして21世紀

講演者：若松　大祐（常葉大学外国語学部グローバルコミュニケーション学科 准教授）
コメンテーター：細見　和弘（立命館大学経済学部 非常勤講師）

〇司会者：テーマ 1 は「鄭成功の描かれ方　1852年平戸，1930年台北，そして21世紀」と題して，常葉大学の若松大祐先生にご講演をいただきます。また，コメンテーターは立命館大学の細見和弘先生にお努めいただきます。まず，お二人のご経歴をご紹介いたします。

ご講演をいただく若松先生は，2000年に同志社大学を卒業した後，2004年に台湾の国立政治大学の修士課程を修了されました。その後，東京大学大学院の博士課程を満期退学し，2014年に博士（学術）の学位を取得されました。2015年に常葉大学外国語学部専任講師に着任され，2018年より現職でいらっしゃいます。また，2014年から2019年にかけては，立命館大学で非常勤講師をお勤めになりました。主な論文に「実事求是の態度と中華民国史の研究：現代中国の唯物史観における方法的転回」『社会システム研究』21号があり，共編に『台湾を知るための72章』があります。

また，コメンテーターをお勤めいただきます細見先生は，大阪市立大学文学部を卒業された後，龍谷大学大学院修士課程東洋史学専攻を修了。その後，龍谷大学大学院博士課程に進学し，単位取得のうえ依願退学されました。現在，立命館大学経済学部で非常勤講師をお勤めの他，当研究所の客員研究員でもいらっしゃいます。また，奈良教育大学教育学部，大阪経済大学にて非常勤講師をお勤めでいらっしゃいます。

それでは，若松先生，細見先生，どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

〇若松：皆さん，こんにちは。若松大祐と申します。本日着ているのは，長崎平戸の鄭成功記念館で買ったＴシャツです。発表内容に関係するので，着てまいりました。発表に先立ち，配布資料を確認しましょう。全部で17ページあります。前半の 8 ページがレジュメです。後半の 9 ページが資料です。

本日は，「鄭成功の描かれ方」というタイトルでお話いたします。目次の通り，話題は大きく 3 つに分かれます。重点は「二，1852年平戸」にあります。ただ，「一，空間，時間，叙述」で背景を説明しますので，やや時間がかかります。そうしますと，「三，1930年台北」をお話しする時間がなくなる可能性があります。

本日の発表は，「鄭延平王慶誕芳蹤」という石碑の内容の検討になります。この石碑は，鄭成功（てい・せいこう，1624-1662，国姓爺，Coxinga）という人物の誕生とその後の足跡を顕彰するものであり，今なお長崎の平戸に立っています。本日は，鄭成功の描かれ方を見直すことによって，歴史を書くことの難しさを改めて実感することになるでしょう。

（なお，本稿はシンポジウムでの口頭発表を大きく改編して文字化したものです。文字化するにあたり，内容上の不足を補ったり，間違いを修正したり，さらにはシンポジウム後に得た知見を盛り込んでいます。）

一，空間，時間，叙述

ここでは，鄭成功を描く上で背景となる事項について，４つほど説明します。本日注目いたします鄭成功は，近松門左衛門の人形浄瑠璃『国性爺合戦』（1715年）の主人公・和藤内（わとうない）のモデルでもあり，日本でも有名な人物です。鄭成功は1624年に現在の長崎県の平戸で生まれます。

私は長らく鄭成功の生まれ故郷である平戸には関心を持ちつつも，台湾へ行くよりも旅費や時間がかかるという理由で，平戸へ行くのを避けてしまっていました。ご承知の通り，2020年春より新型コロナウイルス感染症が世界的に蔓延し，私たちは海外へ渡航できなくなります。私は，自身の研究対象である台湾に行けなくなりました。昨年（2021年）秋ごろから，日本国内の移動が可能になり始めましたので，私は平戸へ行ったのです[1]。さらに，今年（2022年）８月中旬から約２ヶ月間，台湾へ行きました。台南へ足を運び，関係者の協力を得て，鄭成功の祭られている廟宇などを訪ねております。

（１）鄭成功に関係する場所

レジュメには，Google Map のアドレスをいくつか貼り付けています。歴史的な地図では

なく，現在の地図です。鄭成功の生きた時代と現代とでは，地形も道路も交通手段も異なります。とはいえ，複数の場所のおおよその距離について理解できましょう。一つ一つ説明していると時間が足りませんので，いくつか簡単に紹介します。

例えば，こちらは，平戸藩の拠点であった平戸城から，鄭成功の生まれたという千里ヶ浜までの経路です[2]。千里ヶ浜の鄭成功記念公園には，本日取り上げます石碑「鄭延平王慶誕芳蹤」があります。この石碑の近くに，母親が寄りかかって鄭成功を生んだという石があり，「児誕石」と呼ばれています。千里ヶ浜からさらに西へ行ったところに，鄭成功記念館があります。

こちらは，鄭成功の父親の鄭芝龍（てい・しりょう，1604-1661，平戸老一官，Nicholas Iquan）の出身地や拠点です[3]。現在の中華人民共和国福建省泉州です。

こちらは，鄭成功が根拠としていた汕頭や廈門です[4]。

鄭成功が南京に攻めていった時，拠点にした山があります[5]。この山から南京までは，約70 km 離れています[6]。

石碑「鄭延平王慶誕芳蹤」に登場する「海門」は，廈門の近くの島です[7]。同じく，石碑に登場する「奎嶼」は，恐らく圭嶼のことでしょう[8]。圭嶼は金門島とその対岸の福建省の間にあり，今の地図でもほとんど見えないような小島です。

さらに，鄭成功が台湾に来てからの関係個所はこちらになります。鄭成功は，澎湖から台湾へ進み，鹿耳門から台湾へ上陸します[9]。そしてプロビンシャ城（現在の赤崁楼）を，さらにゼーランジャ城（現在の安平古堡）を前後して攻め，オランダを降伏させます[10]。ただし，後述しますように，上陸したのが鹿耳門のどこなのかについては，少なくとも 2 つの説があるようです[11]。

（2）鄭成功に関係する年月日

鄭成功に関係する主な出来事を年表にまとめました。全部お話しする時間はありませんので， 5 つだけお話します。

第 1 点は，鄭成功の生まれた1624年です。この1624年は，ちょうどオランダ（東インド会社）が台湾の統治を始めた年でもあります。再来年（2024年）が，400周年にあたります。台南や平戸では2024年にイベントを開催するようです。例えば台南では400周年を見越して，関係者たちが『あなたと私の鄭成功：生誕400年』[12]という書籍を出版しています。

第 2 点は，鄭成功が台湾に上陸した日です。上陸日と上陸地を巡る論争については，日本語資料では『鄭成功と同時代史研究』[13]が言及しています。上陸日に関して，何が問題になったのでしょうか。もともと上陸日は，1940年に台湾人研究者による調査の結果，「太陰暦の永暦15年 4 月 1 日，太陽暦の1661年 4 月30日」だと決まっていました。ところが，1959年10月18日に台南市文献委員会が，新たに「 4 月29日」に換算し直します。換算方法に誤りがあ

るという指摘がありながら，いつのまにか「29日」の説が中華民国の中央や地方の立法機関や行政機関を通過しました。台湾台南の延平郡王祠（かつての開山神社）で毎年 4 月「29日」に公祭（国家の祭祀）を行うことを，台湾省政府が1963年 4 月25日付けで公式に決定し，現在に至ります。

上陸日だけでなく，上陸地も論争の的になります。台南の媽祖宮（顕宮）にある鹿耳門天后宮あたりなのか，あるいはそこから北に約4 km 離れた土城にある正統鹿耳門聖母廟あたりなのか。論争は1956年に始まり，1961年の鄭成功台湾奪還300周年における調査活動で最高潮に達します。論争は社会問題になり，地元台南の役所や観光業者を巻き込みました。媽祖宮（顕宮）の住民と土城の住民は，子供でも大人でも互いに口を利かなくなり，結婚などもってのほかとなります。

第 3 点は，1852年に肥前国平戸藩が「鄭延平王慶誕芳蹤」を建立し始めたことです。1662年に鄭成功が台湾で没し，約50年後の1715年に日本で近松門左衛門の人形浄瑠璃『国性爺合戦』が上演されます。さらにその約100年後の19世紀初頭には外国船が日本周辺に出没し，1853年にはペリーが浦賀にやって来ました。「鄭延平王慶誕芳蹤」は1852年に陰刻が始まります。石板に文字を刻むのは，時間がかかったのでしょう。黒船来航（1853年）と日米和親条約締結（1854年）をはさみ，1856年に「鄭延平王慶誕芳蹤」の除幕式が行われました[14]。「鄭延平王慶誕芳蹤」については，本稿「二，1852年平戸」で後述します。

第 4 点は，1929年に稲垣其外という人物が台湾で日本語書籍『鄭成功』を出版していることです。稲垣は翌1930年に，ダイジェスト版とも言うべき『鄭成功』も出版しています。稲垣其外による 2 冊の『鄭成功』については，本稿「三，1930年台北」で後述します。

第 5 点は，鄭成功に関係する主な出来事は，東アジアの国際社会がたびたび変動するという状況下で生起しているということです。それぞれの国や地域の主権者が，頻繁に変わります。例えば，鄭成功の生きた時代は，中国大陸で明から清への王朝交代がありました。台湾は，オランダから鄭成功へ主権者が変わります。「鄭延平王慶誕芳蹤」の建立の10年後に，日本は明治維新を迎えます。1895年には台湾が日本の領土となり，1945年には第二次世界大戦での日本の敗戦に伴い，日本から放棄されます。中国では清朝が滅亡して，1912年に中華民国が開国します。中華民国は1945年に日本に勝って台湾を接収するも，1949年に中国大陸の内戦に敗れ，台湾に退避します。

（3）鄭成功に関係する叙述

鄭成功はどのように描かれてきたのでしょうか。このたび先行研究に拠りながら，試みにこれを大きく 6 種類のパターンにまとめてみました。同じ種類のパターン内でも，さらに細分化できる場合もあります。 6 種類に分類したのはあくまでも暫定的です。

ここで重要な先行研究を 2 つ紹介します。一つは前述の『鄭成功と同時代史研究』（1994年）

という資料集です。同書には論文のみならず，大量の文献一覧が含まれています。同書は出版年である1994年までに，日本，中国，台湾で，さらに欧文で，鄭成功がどのように研究されてきたのかについて網羅的に説明しているのです。本日のシンポジウムでコメンテーターを務める細見和弘先生は，同書の著者の一人です。

もう一つは，藍弘岳「あなたの忠臣でもあり，私の英雄でもある」（2020年）[15]という論文です。『鄭成功と同時代史研究』は1994年に出版されました。今年は2022年ですので，同書の出版は約30年前のことです。藍弘岳論文は，この30年間に展開された研究成果をも踏まえてあり，最近の研究動向を知ることができます。私は今年の夏に台北へ行った際，友人から藍弘岳論文の存在を聞き，国家図書館で早速閲覧と複写を行いました。

（なお，本来は一つ一つに典拠を示すべきであるものの，読者の読みやすさを優先して，典拠となる先行研究は本稿文末に参考文献表としてまとめて挙げました。）

1．江戸時代の日本（鄭成功の同時代〈17世紀〉から明治の中頃〈1890年代〉まで）

江戸時代の日本において，鄭成功はどのように描かれていたのか。鄭成功は忠義（国家や君主に対する誠）を尽くす人物として，描かれていました。しかも，忠や義という理念は，母親（日本人）に由来するのです。つまり，忠義が日本から鄭成功に伝わったことが強調されます。近松門左衛門『国性爺合戦』（1715年）が忠義を説いたのが鄭成功ブームを巻き起こし，江戸時代における鄭成功イメージの形成に大きく影響します。

2．清末の台湾（洋務運動期，特に1874年牡丹社事件以後）

清末の中国では，特に台湾では鄭成功がどのように描かれていたのか。長らく中国（清朝）では鄭成功は評価されていませんでした。鄭成功は「反清復明」（清朝に反抗して，明朝を復興する）をスローガンに掲げて活動した人物だからです。しかしながら清末になると，清朝が鄭成功を評価するようになります。すなわち，鄭成功は確かに清朝に敵対していたけれども，（明朝に）忠義を尽くすという点においては一貫した人である。さらに，鄭成功は漢人による台湾の開発（開台，開山）の先駆けである，と清朝が評価し始めます。鄭成功が台湾の民衆に果たした貢献や与えた影響は大きく，民間には鄭成功を慕い続ける雰囲気がありました。そこで，これを理由に，沈葆楨は1875年に鄭成功の殊勲を認めるよう上奏します。清朝は激変の波を迎えていた19世紀後半に，台湾の民心をつなぎ，列強の狙う台湾を自らが上手く統治していくために，上奏を容れたのです。

3．戦前の日本，日本統治時代の台湾（1895－1945）

戦前の日本，特に日本統治時代の台湾では鄭成功がどのように描かれていたのか。まず日本では，近世（江戸時代）から現在までに 3 回の鄭成功ブームがあったようです。 1 回目は

近松門左衛門『国性爺合戦』（1715年）の上演のころであり，2 回目は日清戦争（1894-95年）で台湾が日本の新たな領土になって以降であり，3 回目は1937年の日中戦争勃発後です。1941年には，長崎県が平戸市川内町の鄭成功居宅跡を史跡として指定します。明治以降のブームは日本で中国大陸への関心が高まった時と重なる，という指摘もあります。

続いて，台湾に限定してみましょう。台湾では1910年代を境に，前後して 2 種類の描き方があります。1 種類は，鄭成功の意義を台湾開発に置く描き方です。上述の通り，19世紀後半に清朝は台湾で鄭成功を評価するようになります。ところが，日清戦争の結果，下関条約で1895年 4 月に清朝が台湾を日本に割譲しました。同じ台湾においてであっても，1895年（光緒21年）以前の描き手は清朝であり，1895年（明治28年）以降の描き手は日本になったのです。日本は植民地統治下の台湾で，台湾を開発した人物として，鄭成功を描きます。代表的な書籍に，丸山正彦『台湾開創鄭成功』[16]があります。この書籍は鄭成功の生涯全体を述べながら，書名を「台湾開創」（台湾開発）にしています。実際に台湾開発を論じているのは，書籍全体の 5 ～10% に過ぎないのにです。しかも，鄭成功は母親が日本人であり，父親が漢人ですから，日漢が清朝に対抗して台湾を確保すべきである，という雰囲気を本書は持っています。確かに1895年に日本の台湾統治が始まったころ，中国には清朝がありました。そのため，日漢による台湾統治という説明は，1895年以降，日本による台湾統治という現実を正当化するのにつながったのでしょう。

もう 1 種類は，鄭成功の意義を南洋開発に置く描き方です。1911年に辛亥革命が起こって清朝が崩壊し，1912年に中華民国が建つと，日漢が清朝に抗って台湾を確保するという説明は，説得力を失います。そこで，鄭成功は実は南洋開発を考えていたのだ，という論点が登場します。舞台脚本『国姓爺後日物語』にはフィクションながら，鄭成功が台湾開発と明朝復興だけでなく，豊臣秀吉の朝鮮出兵に倣い，南洋遠征を企てるというひとコマがあります[17]。こうした描き方は，本稿で後述いたします稲垣其外『鄭成功』（1930年）にも現れます。

4．1945年以降の台湾（中華民国による統治）

第二次世界大戦後（1945年以降）の台湾では，鄭成功がどのように描かれていたのか。鄭成功は中華民族の英雄として描かれることになります。1950年夏に台湾省文献委員会が鄭成功の誕生日を太陰暦 7 月14日（太陽暦 8 月27日）だと考証して以来，鄭成功研究がブームになります。研究ブームは，とりわけ1961年に最高潮へ達しました。1961年は，ちょうど中華民国の開国50周年です。そして，鄭成功が台湾をオランダから奪い取って，漢民族が台湾を統治し始めた1661年から，ちょうど300周年です。（ちなみに，中華人民共和国の方では1962年を300周年に位置付けたようです。）

鄭成功は外国の侵略者から台湾を中国に取り戻した人物として，英雄視されたのです。第二次大戦後の台湾では，中華民国の国民党政府（かつての国民政府）は，自身が日本から台

湾を取り戻したと主張していました。こうした主張が背景になり，鄭成功は歴史上の模範に位置付けられたのでしょう。

台湾において鄭成功が人気ある研究対象になるも，研究ブームは1961年以降，次第に勢いを失います。きっかけは，（前述しました）鄭成功上陸の日と場所を巡る論争でした。

論争が約二十余年にわたり，上陸地と上陸日という個別具体的な事項について，特定の人々が言い争っているうちに，台湾社会の情勢が変わります。従来軽視されがちだった台湾の歴史が，1970年代から重視され始めます。そして1980年代には，中国史とは異なるものとしての台湾史という考え方が登場します。中学校の教科書『認識台湾』（1997年）では，鄭成功は民族英雄としてではなく，台湾の開拓者として登場します。同時に，鄭成功が原住民の生活に大きな被害を与えたことも，記されます。つまり，台湾では20世紀末になると，鄭成功という人物を国家レベルで褒め称えなくなったのです。

2000年ごろから，新たな動きが出てきました。鄭氏一族が細々と持ち続けてきた台南の鄭氏家廟を，1999年に大改修します。鄭氏家廟は2000年から正式に対外開放され，2002年には改称して鄭成功祖廟になります。鄭成功に関する祭祀と言えば，従来は４月29日に官祭（公祭）を延平郡王祠で行ってきました。2002年ごろからは同じ４月29日に，官祭に続き，鄭成功祖廟でも鄭成功文化節（民間の祭祀）を行うようになりました。2011年ごろから，台南と平戸で関係者が，台南での４月29日の祭祀と平戸での７月14日の生誕祭（鄭成功まつり）を行き交うようになります[18]。

とはいえ，昨今は，鄭成功はもはや人口に膾炙する存在ではありません。私が仄聞するところでは，2020年代の現在，台南にある成功大学の名前が Success に由来すると思い込んでいた人（しかも卒業生）がいるとか，台南駅前のロータリーの銅像を蒋介石だと思い込んでいた人（しかも台南出身者）がいるとか，そういった人がいるようです。また，平戸でもほとんどの人が「鄭成功とは誰なの？」という状況である，とも聞きます。

５．戦後の日本（1945－現在）

第二次世界大戦後（1945年以降）の日本では，鄭成功がどのように描かれていたのか。戦前に比べると同時代の国策との関わりをほとんど持たず，単なる歴史上の人物として描かれることになります。鄭成功に関する研究はあまり進まず，長らく低調でした。戦前に研究を展開していた石原道博『国姓爺』[19]があるくらいです。とはいえ，東アジアや環シナ海といった視野に基づく研究が，新たに登場しています。

平戸には，鄭成功逝去300周年の1962年に台湾台南の延平郡王祠から砂が届き，分霊廟として川内の丸山に鄭成功廟が建ちます。1962年というのは，前述の通り，台湾で鄭成功に関する研究が最も盛んになったころです。鄭成功廟を設置して以降，平戸では毎年６月（５月？）８日に例祭（鄭成功まつり）を行い，1982年以降は台湾からの親善訪問団を受け

入れます。なお，鄭成功まつりは，1990年から 7 月14日の開催になりました。

1994年 7 月14日には，（本稿ですでに何度も言及していますように，）平戸で鄭成功生誕370年を祝う記念行事が開催されます。例年の鄭成功まつりに比べ，1994年は規模を大きくしての実施になりました。平戸での地域起こしだけでなく，平戸を中心にする国際交流にもなりました。翌1995年に平戸市と中国福建の南安市が友好都市になるのは，鄭成功がきっかけです。日台（主に平戸と台南）の交流に，日中（主に平戸と南安）の交流が加わります。2013年には平戸川内に鄭成功記念館が開設されます。現在は2024年に鄭成功生誕400周年の記念行事を開催すべく，平戸では関係者が準備しています。

6．中華人民共和国（1949－現在）

1949年以降，中国（中華人民共和国）では，鄭成功がどのように描かれていたのか。鄭成功は外国の侵略者（オランダ）から台湾を中国に取り戻したという理由で，一貫して偉大な民族英雄として描かれてきました。中国では1962年以来，福建省において研究活動が盛んです。福建が鄭芝龍の出身地であり，拠点だったからです。1962年に鄭成功の台湾奪還300周年記念の学術会議が，1982年に320周年記念の学術会議が，そして1987年に鄭成功研究国際学術会議が，いずれも廈門で開催されます。

2010年ごろからは，中華人民共和国が台湾を接収して中国全土を統一するという政治的目的のために，鄭成功研究が強化されています。鄭成功に関する史実を研究すればするほど，中国大陸と台湾との歴史的な関係を無視できないからでしょう。2013年 6 月には雑誌『鄭成功研究』が創刊され，創刊号の巻頭には，習近平「福建省および泉州市の各界が鄭成功による台湾奪還を記念する335周年大会における講話」（1997年 7 月15日）が載ります。

（4） 近松門左衛門『国性爺合戦』

最後に，ここで近松門左衛門の人形浄瑠璃『国性爺合戦』（1715年）の持つ意味について触れておきましょう。『国性爺合戦』は事実を元にしているとはいえ，あくまでもフィクションです。例えば，『近松全集』〔第 9 巻〕[20]の pp.628-631に載る梗概を読むだけでも，『国性爺合戦』の内容が歴史的事実と大きく異なるのを理解できます。また，例えばあるインターネット・サイトは，『国性爺合戦』の内容を「韃靼人（満州人）の侵入により崩壊した明朝を再興させるために，中国人と日本人の混血である和藤内（のちに国性爺鄭成功と呼ばれる）が奮闘する物語です。最終的には明朝が再興します（！）」というように整理して，ほとんどが虚構なのだと指摘するほどです[21]。

しかしながら，観劇者の多くはいわば大河ドラマを楽しんでいるのであり，虚実を判別したいのではありません。観劇者において，『国性爺合戦』における和藤内という主人公が，鄭成功という歴史上の人物にほぼ重なります。

とはいえ，虚実混交ではいけない，と考える人々もいます。市川信愛によると，寺田隆信が1982年の福建での320周年記念の学術会議において，鄭成功をフィクションの領域から事実の領域に引きもどした学者として，天保年間の守山正彜（もりやま・まさのり），嘉永年間の平田貞幹，明治大正期の幸田露伴，現在（昭和）の石原道博を挙げたといいます[22]。

二，1852年平戸

本日注目します「鄭延平王慶誕芳蹤」という石碑は，平戸藩がまさに鄭成功をフィクションの領域から事実の領域に引きもどすため，幕末に千里ヶ浜に建立されました。しかし，この石碑はその存在はよく知られているのに，重要性がどこにあるのか，私はよくわかりません。さらに碑文は漢文（白文）で書いてあるので，私は内容を読み解くだけで一苦労です。先行研究[23]に基づいてわかったことを，４つほど紹介しましょう。

第一に，建立の目的です。松浦家第35代の熈（ひろむ）が隠居後，鄭成功の偉業を讃えるために，この石碑を建立しました。先行研究によると，1850年前後の当時，平戸藩内に鄭成功顕彰の機運が高まりました。松浦熈は石碑を設置することで，（a）対内的には，第34代の松浦清以来の文教奨励政策を展開しようとしました。また，（b）対外的には，天保年間（1840-1844）以来の頻繁になる外国船の接近による緊迫を打開しようとしました。しかしながら私は，鄭成功の生涯を顕彰することで忠義の重要性を説くというのを理解できても，石碑を設置すると外国船が平戸に接近しなくなるとは思えません。建立の目的については，引き続き調査が必要です。

第二に，文字数です。そもそもは平戸藩の命を受けて，儒者の朝川善庵（1781-1849）が『鄭将軍成功伝』（約5000字，1850年）を上梓します。しかし，約5000字を刻める巨石がなく，文字数を削減せざるを得ません。加えて，朝川善庵が没します。そこで平戸藩は葉山高行（鎧軒，1796-1864）に削減を命じます。結果，葉山鎧軒が縮小し，1852年（嘉永５）に約1500字の碑文ができあがりました。文章は，すべて漢文（白文）で書いてあります。

第三に，建立者の意図です。平戸藩の意図は，公式見解を新たに示すことでした。そもそも守山正彜『平藩語録 鄭氏兵話』（上中下３冊，1831年）[24]があり，これは鄭成功に関する平戸藩の公式見解でした。そこで，石碑（「鄭延平王慶誕芳蹤」）は新しい公式見解になります。

『鄭成功碑銘』（３冊１袋，1856年？）が伝えるのは，平戸藩が特に鄭成功の生母，出生地，父親鄭芝龍の動向，鄭成功の渡海年，鄭氏の居宅跡という５項目について，地元の人々へ聞き取り調査を行い，新たに公式見解を示したことです。そして，平戸藩は時に古い公式見解（『平藩語録 鄭氏兵話』）を排除して，生母を伊東氏から田川氏に改め，出生地における児誕石の保存すべきを強調し，父親鄭芝龍について川内浦を拠点にした海商であると述べ，渡唐年を14歳から７歳に改め，居宅跡を後の喜相院の境内に推定したのです。特に後世の人々を

驚かせるのが，新旧の公式見解において，生母が異なることです。ただし，新しい公式見解において生母を田川氏だと言いながらも，田川マツとは言っていません。そもそも「マツ」や「まつ」や「松」という名前は，どの文献で特定されているのか。さらなる調査が必要です。

なお,『鄭成功碑銘』および『平藩語録』は松浦博物館に所蔵されています。興味深いのは,『平藩語録』が 2 種類あり，そのうちの 1 種類は1951年（?）に葉山鎧軒が書写したものです。そこで，葉山鎧軒は恐らく守山正彝『平藩語録 鄭氏兵話』（1831年）の内容も踏まえながら碑文（「鄭延平王慶誕芳蹤」1500字，1852年）を作ったと言えそうです。したがって，葉山鎧軒は朝川善庵『鄭将軍成功伝』（約5000字，1850年）を単純に縮小して，碑文（「鄭延平王慶誕芳蹤」1500字，1852年）を作ったわけではないのです。

第四に，碑文の内容です。約1500字のうち，約70% が鄭成功の生涯を描きます。残りの30% では，作者（葉山鎧軒）が150字で，そして松浦熙が300字弱で鄭成功の生涯にそれぞれコメントします。

碑文が強調するのは，忠孝義勇という鄭成功の人柄です[25]。こうした人柄は，貞烈な母親に由来するというのです[26]。日本人の母親から生まれ，日本しかも平戸で生まれ育ったから，鄭成功は忠義を重んじて節操を守る人物になった，と平戸藩は強調します[27]。こうした論点は，特に日本における鄭成功イメージに大きく関わります。碑文が示す見解が，現在まで伝わっているのです。対して，現在まで伝わらなかった見解も，碑文に書いてあります。松浦熙が鄭芝龍を高く評価しているのです[28]。建立当時はそもそも意外性を持つ論点であり，その後も定着しなかったようです。

三，1930年台北

本日もう一つ注目しますのは，稲垣其外『鄭成功』（1929年）[29]です。著者の稲垣其外（孫兵衛）は，同書の執筆当時は台湾経世新報社主筆でした。1937年 3 月に死去し，これに伴い『台湾経世新報』は同年 7 月25日に廃刊になります[30]。

『鄭成功』の「緒言」によりますと，そもそも稲垣其外が1926年 3 月から1928年 6 月まで『台湾経世新報』に，「鄭成功と日本」と題する文章を連載しており，それを 1 冊にまとめて本書ができあがります。連載時から，すでに内容が「鄭成功と日本」を越えて，「鄭氏三代の史蹟及び夫れ以前の台湾の近代史」を書いていました。そこで，『鄭成功』と題することにしたようです。さらにさかのぼりますと，稲垣は『台湾全誌』〔全 8 巻〕（台北：台湾経世新報社，1922.5-1922.12）の刊行（覆刻）に大きく関与しており，そこでの編集作業を踏まえ,「鄭成功と日本」を『台湾経世新報』に連載するようになったのでした。したがって，稲垣『鄭成功』の出版は，1930年10月26日－11月 4 日に開催された台湾文化三百年記念会に合わせた

ものではなさそうです。

また，稲垣には同名の著書があり[31]，こちらは分量や内容からダイジェスト本と言えます。稲垣の 2 種類の『鄭成功』は台湾在住のジャーナリストによる鄭成功研究であり，その代表であり，台湾で多くの人々に愛読されたようです。

稲垣『鄭成功』の内容は，鄭成功による台湾開発です。丸山正彦『臺灣開創鄭成功』以来の論点です。丸山が台湾開発を題しながら，実際に紙幅を割いたのが書籍全体の 5 ～10% に過ぎなかったのに対し，稲垣は約70% の紙幅で台湾について論じます。また，「鄭氏以前の日本と台湾」という章からもわかるように，本来日本人が台湾を治めていたのだとほのめかします。その後，鄭芝龍，オランダ，鄭成功，清朝がそれぞれ前後して台湾を収めたのだから，1930年現在に日本（台湾総督府）が台湾を治めるのは，当初の姿に戻ったことになります。稲垣『鄭成功』は丸山正彦『臺灣開創鄭成功』以来の日本による台湾領有の正当化という論点を継承しているのです。さらに，鄭成功によるフィリピン攻略にも少し言及があります。舞台脚本『国姓爺後日物語』以来の鄭成功による南洋開発という論点が，稲垣『鄭成功』にも登場したと言えます。

おわりに

最後に，これまでの議論をまとめてみましょう。そもそもは，石碑「鄭延平王慶誕芳蹤」（1852年）に何が書かれているのか，という素朴な疑問がありました。まずは，碑文を翻字して原文（漢文）を現代語に訳出し，そして様々な鄭成功イメージ（描かれた鄭成功）の中で，碑文が伝える鄭成功イメージの持つ特徴を浮き彫りにしようと試みました。すると判明したのは，とりわけ田川氏という母親，出生地となった千里ヶ浜の児誕石，7 歳での渡唐という論点が，石碑の制作過程で考証されて確定したことです。この 3 つの論点は今や鄭成功に関する基本的な史実として定着しています。（もちろん定着したからといって，正確かどうかはわかりません。）基本的史実を確定して公示したところに，石碑の意義があると言えるでしょう。

本発表では，碑文を読解するための背景として，様々な鄭成功の描かれ方を概観しました。鄭成功は，日本，台湾，中国において長らく国策の展開に適うように描かれてきました。日本や台湾では，今や鄭成功を国家レベルで評価して描くことはありません。対して中国はなおも国策に即して描き，その雰囲気は2010年ごろから強まっています。

私たちは今後，鄭成功をどのように評価すべきでしょうか。確かに鄭成功は，彼自身が生きている時代の東アジアや環シナ海に大きな影響を与えました。しかし，私たちの先輩たちは，先輩たちの同時代の必要から鄭成功を強引に意味付けて描いてきました。現在，「鄭成功はマージナルな人である」と言ったとしても，マージナルな人物についての研究はすでにありますから，今さらわざわざ鄭成功を事例にする意味が見つけにくいでしょう。鄭成功は

これまで重視されてきたから，今後も引き続き重視すべきだと考えるのは，トートロジーになります。私たちは鄭成功をどう描けるのでしょうか。

私からは以上になります。では，細見先生，お願いいたします。

主要参考文献

長崎鄭成功と同時代史研究会（編）『鄭成功と同時代史研究：鄭成功生誕370年記念：目録・解説・展望』長崎：鄭成功と同時代史研究会，1994年 7 月。

林田芳雄『鄭氏台湾史：鄭成功三代の興亡実紀』〔汲古選書37〕東京：汲古書院，2004年 2 月。

江仁傑『解構鄭成功：英雄神話與形象的歴史』〔文明叢書13〕台北：三民書局，2006年 4 月。

傅朝卿，詹伯望『圖説鄭成功與台灣文化：國姓爺・延平郡王・開臺聖王』〔台灣建築文化資産教育導覽叢書 2 〕台南：台灣建築與文化，2006年 4 月。

高致華『鄭成功信仰』〔台海歴史文化研究叢書〕合肥：黄山書社，2006年 5 月。

岡部狷介（編）『史都平戸 : 年表と史談』〔 9 版〕平戸：松浦史料博物館，2010年 7 月。

岡山芳治「台南市における鄭成功関係史跡」，『平戸史談』17号（平戸：平戸史談会，2010年），pp.44-56。

『成功啓航：2011鄭成功文化節活動成果專輯』台南：台南市政府文化局，2011年 7 月。

遠流台湾館（編著），横澤泰夫（編訳）『台湾史小事典』〔第 3 版〕福岡：中国書店，2016年11月。

新納遼子「〈史料紹介〉日本における鄭成功像の形成 : 明治期の新聞記事を中心に」（〈Historical Material〉Formation of Zheng Chenggong Image in Japan），『史泉』125巻（吹田：関西大学史学会，2017年 1 月），pp.20-33。

『台南鄭成功建廟355周年特刊』台南：鄭成功祖廟（市定古蹟鄭氏家廟），社團法人台南市滎陽鄭氏宗親會，台南市鄭氏宗親會，2018年 4 月。

藍弘岳「你的忠臣也是我的英雄：鄭成功，江戸文藝與日本帝國的臺灣統治」，『思想』41期（台北：聯經，2020年11月），pp.157-201。

若松大祐「鄭成功をめぐる近年の国際文化交流 : 長崎県平戸からの広がり」，『常葉大学外国語学部紀要』38号（静岡：常葉大学外国語学部，2022年 3 月），pp.55-62。

赤松美和子，若松大祐『台湾を知るための72章』東京：明石書店，2022年 3 月。

周芷茹（編著）『你我鄭成功：2024誕生400年』台南：安平文教基金會，2022年 5 月。

小俣喜久雄『鄭成功信仰と伝承』〔新典社研究叢書358〕東京：新典社，2022年12月。

〇細見：細見と申します。若松先生のご報告の中で何度か取り上げられましたけれども，以前九州で鄭成功の生誕370周年を記念する一大イベントが企画され，それに向けて準備するというので，私はある研究会でその話を聞いて，ちょっと行ってきますというような非常に軽い乗りで参加したことがあります。それがきっかけで鄭成功生誕370周年の記念論文集の中

に入っているわけですが，中国語の文献目録を作成し，石万寿さんという方の書かれた『台湾における鄭成功研究の現状』という論文の翻訳をすることになりまして，このときに少し手伝ったということで今日コメントをすることになったんだと思います。もう30年ぐらい前のことになりますので，実はすっかり昔のことになってしまって忘れてしまっていたものですから，今若松先生から，鄭成功をどう捉えるかとか，どう評価すべきかというような問題提起が出されましたけれども，私はこうした最先端の問題提起を今直ぐ受け止められる用意はありませんが，その時に印象に残ったことがありましたので，少し紹介してみたら，ひょっとしたらシンポジウムに資するものがあるかなと思いまして，それでレジュメにしたわけです。

九大のシンポジウムでは曹永和先生の講演を拝聴いたしました。この方は当時，台湾大学と兼任で中央研究院の歴史語言研究所だったか，その辺は忘れましたけれども，教授をされていた，たいへん高名な先生でいらっしゃって，台湾の世界史的位置というようなことを強く意識されて，論文もたくさん書いておられます。このとき曹永和先生は，台湾における鄭成功研究に対して，深い危機感を抱いておられて，それを「袋小路に陥っている」というふうな言い方をされ，何回も繰り返し言われたものですから，私の頭に残っておりましたもので，主催者の九州華僑華人研究会の会報にこの時の様子を書いたことがあります。以下は，先ほどの若松先生の話とかなりかぶりますが，まず鄭成功のお母さんが日本人だということです。それから台湾は，日清戦争で日本に負けてから日本の植民地になり，それ以来，この鄭成功研究熱というのが非常に高まったことがあります。日本がアジア太平洋戦争に敗れてからは，この時を境にこの研究状況の衣装が改められて，台湾省文献委員会というところで台湾通史が編さんされて，若松先生のレジュメを見ると，どうも台湾通史だけではなくて，鄭成功の研究も担っていたようです。そのほか，台南市や台南県の文献委員会が中心となって，鄭成功研究が進んで，1960年代になってピークを迎えたわけですが，いろいろ面倒なことが起こって，それから以後は下火になってしまった。それで「袋小路に陥った」というわけです。

曹先生はその理由として四つ挙げられましたが，一つは史料上の制約があるということです。台湾で手に入れられる史料は出し尽くされてしまったと。これが一つ。それから，大陸で毛沢東と戦って敗れてしまった蒋介石の政権，それが台湾に来たわけですが，その蒋政権と鄭政権――鄭政権というのは，鄭成功とその息子さんの鄭経と，次の代は何やら不倫とかいかがわしいことがあるようですが，鄭克塽という 3 代で滅んでしまったものですから，こうした鄭政権の研究が，蒋介石の滅亡というものを暗示するような，つまり当てつけになるのではないかということになりまして，それで蒋介石の怒りに触れたらいかんので，曹先生が「触らぬ神にたたりなし」とおっしゃられたように，要するに鄭成功の研究はしないほうが無難であるということです。下手したら弾圧されるし，逮捕されるかもしれないし，監獄

にぶち込まれるかもしれないし，やはり怖いということで，それならやめとこかということになるわけです。それで，鄭成功を研究する人が少なくなった。それから，外省人と本省人，台湾人との間の仲たがいが歴史研究者の中でも起こって，台南に住んでいる在住の人と蔣介石と一緒にやって来た廈門出身者との間の関係がだんだん険悪になってきて，それはすさまじいものがあったらしい。

次の四つ目も若松先生の話により詳しく出ていますし，石万寿さんの論文の中でもふれられています。石万寿さんがこの論文の中で言っておられるように，地元の観光業と「鄭成功の上陸地点はどこか」ということが絡んでくるわけです。それで，利害関係というものが歴史研究というものと，これは自由でなければいけないのに絡み合ってしまって，それでもう研究ができなくなってしまったわけです．こうして袋小路に陥ってしまった情況からどう抜け出るかということで曹先生は問題提起されましたが，一つは政治状況です。これは1990年代から劇的といいますか，飛躍的といいますか，台湾では民主化というのが進みまして。もう皆さんご存じだと思いますけれども，総統選挙も始まって，私の眼には二大政党制が定着して見え，政権交代もあったりして，非常にダイナミックに動いていっているように思います。いまなら曹先生はこの点はきっと心配しておられないと思います。

それから，もう一つ挙げられたのは，新しい史料を見つけ出さなきゃいけないということです。新しい史料を見つけることが必要だといっても，これまで現存する漢文史料だけでも実は非常に豊富にありまして，それをじっくり翻訳しながら読んでいくというのは時間もかかるし，手間もかかるし，大変な作業になるのに，新しいものをさらに見つけなきゃいけないとおっしゃられるわけです。これまで現存する史料，実は数多く公刊されておりまして，それを使って非常に立派な専門書を書かれたのが林田芳雄先生です。林田先生が書かれたのは『鄭氏台湾史―鄭成功三代の興亡実記』（汲古選書37）という本なんですが，鄭成功研究の基盤となる労作です。漢文は読むのが大変だし，分量もたくさんあるし，手を付けるといいますか，これをやってやるぞという，そういう勇気というか，パッションというか，ガッツというか，そういうのがなかなか出なくて，結局，その史料の前に足がすくんでしまうみたいなことになってしまうわけですが，そこを果敢に取り組まれた林田先生の研究というのは，稀有の業績のように思います。若松先生もぜひ読んでください。

先ほど，新しい史料を発掘する必要性についてふれましたが，比較的手に入りやすい史料であっても少しずつじっくりと腰を落ち着けて読んでいって，今日の若松先生のように丁寧に訳していく研究スタイルをとるというのは，非常に重要であると思います。レジュメに載せられた1852年の「鄭延平王慶誕芳蹤」という翻訳でありますが，これを読んで私は非常に感銘を受けました。歴史のつかみ方に見るべきものがあると思います。今日は歴史意識の面を中心に焦点を当てておられますが，歴史事実をありのままに把握しようという実証的な立場というものがやはりはっきりと表れていて，19世紀の中頃ですから，まだ東大もないし，

京大もないし，史学科もないわけですけれども，そうした中でこれほどの実証性を持った歴史叙述が成立していたというのが，私は注目すべきことではないかと思ったんです。それで，思うというところまでは私もできますが，そこから先はよくわからなくて，これはできたら教えていただけたらうれしいなと思います。親衛隊長とかいうものすごい勇ましい，これを肩書って言っていいんでしょうか，ハヤマさんという方なんですけども。この方はどういう人なのか，親衛隊という組織とか，ハヤマタカユキさんという人物，このことがわかったら，より深く，事実だけではなくて歴史意識という面においても，深く理解ができるのではないかなと思った次第です。当時の儒学者がはやばやと歴史学というのを身につけているものなんだろうなという具合に非常に感心するというか，何かしら歴史学，西洋の実証史学，日本が取り入れた学問につながるような学問的な基盤というものがこの平戸という場所で形成されていたのではないかなと思って，非常に興味深く感じました。

私はかなり年老いたほうになりまして，鄭成功が死んでからちょうど300年後に生まれて，それから60年生きています。不思議なめぐり合わせがあるもので，鄭成功が死んでから360年という年に今日のシンポジウムに呼ばれました。私は普段，鄭成功が死んで300年後に生まれたというのは何か縁があるのかなと思いながら，鄭成功のことを勉強しています。そういうことで今日のところはご勘弁をお願いしたいと思います。以上です。

注

1　若松大祐「鄭成功をめぐる近年の国際文化交流 : 長崎県平戸からの広がり」，『常葉大学外国語学部紀要』38号（静岡：常葉大学外国語学部，2022年 3 月），pp.55-62。
2021年は，日本国内で台湾と関係している場所へ行きました。平戸の他に，後藤新平の出身地である岩手県の水沢，西郷菊次郎（西郷隆盛の長男）の出身地である奄美大島の龍郷，八田與一の出身地である石川県の金沢です。いずれも，平戸と同様に，私が行くのを後回しにしていた場所ばかりです。

2　Google Map「平戸城→鄭成功記念公園（千里ヶ浜）→鄭成功兒誕石→鄭成功記念館」（https://goo.gl/maps/Um2VB71vqisSyvWr5）。

3　Google Map「福建省泉州市鯉城区（泉州古城）→鄭成功文化旅遊区（安平城，南安市安平）→鄭成功墓（南安市水頭）」（https://goo.gl/maps/TyLJmeGJnpyDb6rb7）。

4　Google Map「南澳島（汕頭市）→コロンス島（鼓浪嶼）」（https://goo.gl/maps/78oPGQMNiHUte2g99）。

5　Google Map「京峴山→瓜州」（https://goo.gl/maps/YhD24n8UbP29w3mu6）。

6　Google Map「鎮江市→南京市」（https://goo.gl/maps/8QcxtUze7fWUWa8a8）。

7　Google Map「アモイ（廈門）→海門島まで」（https://goo.gl/maps/uyEaRSTnMge8CEie9）。

8 Google Map「圭嶼」（https://goo.gl/maps/uMoffHgL4PbJjQmV8）。

9 Google Map「澎湖諸島→台南の鄭成功紀念公園（鄭成功登陸鹿耳門紀念碑）→安平古堡」（https://goo.gl/maps/RXeuAa6LBzAmTNM46）。

10 Google Map「赤崁楼（旧プロビンシャ城）→安平古堡（旧ゼーランジャ城）」（https://goo.gl/maps/DLiX1PUJAijL71kj6）。

11 Google Map「府城天険→顕宮鹿耳門天后宮→正統鹿耳門天上聖母紀念碑→鄭成功紀念公園（鄭成功登陸鹿耳門紀念碑）→古鹿耳門媽祖廟遺址 廟地窟」（https://goo.gl/maps/pg1E1yx3Jvha3SAC7）。

12 周芷茹（編著）『你我鄭成功：2024誕生400年』（台南：安平文教基金會，2022年 5 月）。

13 石万寿（著），細見和弘（訳）「台湾における鄭成功研究の現状」，長崎鄭成功と同時代史研究会（編）『鄭成功と同時代史研究：鄭成功生誕370年記念：目録・解説・展望』（長崎：鄭成功と同時代史研究会，1994年 7 月），pp.37-54。

14 吉福清和「鄭成功の遺品と居宅跡の発掘調査について」，長崎鄭成功と同時代史研究会（編）『鄭成功と同時代史研究：鄭成功生誕370年記念：目録・解説・展望』（長崎：鄭成功と同時代史研究会，1994年 7 月），pp.97-99。

15 藍弘岳「你的忠臣也是我的英雄：鄭成功，江戸文藝與日本帝國的臺灣統治」，『思想』41期（台北：聯經，2020年11月），pp.157-201。

16 丸山正彦（松廬主人）『臺灣開創鄭成功』（東京：嵩山房，1895年11月）。国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/pid/782226）。丸山正彦（編著），張鑄六（譯）『臺灣開創鄭成功』（東京：四素寄廬，1903年）。丸山正彦は平戸出身である。

17 鹿島櫻巷『国姓爺後日物語』（臺北：愛國婦人會臺灣支部，1914年 1 月），pp.30-31。国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/pid/1184916）。

18 平戸と台南と福建（南安）の国際交流の始まりについては，さらなる調査が必要です。
台湾の鄭氏宗親会は，1982年 6 月以来，毎年 6 月（1990年からは 7 月）に数十名の親善訪問団を平戸へ派遣します。鄭親池（編）『平戸と鄭成功』（台北：鄭親池，1996年 2 月），pp.41-42。
平戸から台南へは，1990年 4 月29日に10名強の親善訪問団の派遣が始まります。1990年には福建南安から平戸へ鄭氏関係者を招き始めます。「鄭成功記念館の建設を国際的規模で呼び掛ける」，長崎鄭成功と同時代史研究会（編）『鄭成功と同時代史研究：鄭成功生誕370年記念：目録・解説・展望』（長崎：鄭成功と同時代史研究会，1994年 7 月），p.96。

19 石原道博『国姓爺』〔日本歴史学会編「人物叢書」22〕（東京：吉川弘文館，1959）。

20 近松門左衛門「国性爺合戦」，近松全集刊行会（編纂）『近松全集』〔第 9 巻〕岩波書店，1988年，pp.627-749。

21 「黒井瓶「『国性爺合戦』を読み解く」（2021年12月27日17:47）」（https://note.com/jaguchi975/n/ncb9c2d7a53d2）［2022/11/09確認］。

22　市川信愛「僑郷・閩南（びんなん）探訪記―福建省鄭成功研究学術討論会（1982年 7 月）に出席して―」,『東南アジア研究年報』〔*Annual Report*〕23号（長崎：長崎大学東南アジア研究所，1982年12月），pp.55-86。

23　吉福清和「鄭成功の遺品と居宅跡の発掘調査について」，長崎鄭成功と同時代史研究会（編）『鄭成功と同時代史研究：鄭成功生誕370年記念：目録・解説・展望』（長崎：鄭成功と同時代史研究会，1994年 7 月），pp.97-98。

24　「新日本古典籍総合データベース＞平藩語録／鄭氏兵話」（https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/029229383）。

25　「成功は父を諫めるも父は聴き入れず，さらに死ぬ運命になかった母の死を悼み，慷慨して義兵を起こそうと考える。（…中略…）人々を集め数千人を得て，「忠孝伯，招討大将軍」を名乗る。永暦の即位と改元を聞き，成功は正朔を奉じて南澳に拠った。」
「忠孝義勇について，彼ほどのものを見つけられない。」（松浦熙のコメント）

26　「泉州城が清兵に包囲され，城が落ち軍民もともに潰えた。田川氏は歎いて言う。「事もはやこれまで。どのような顔をして人様にお会いできようか」と。そして城楼へ上り，自ら首を切って城下の濠へ身を投げた。清の兵士たちは，「女がすごいものだ。これが倭人の勇ましさなんだ」と言った。」

27　「成功はちょうど良い時，良い君主に出会うことがあり，自ら大義を唱え，明朝の恢復を自任した。その正直な心意気は，輝いて誠実で節操を守るものである。天地とともにあった。しかも，母もまた操を堅く守って気丈である。実に日東の出身者として恥じない。これは，我が領内での素養に基づくのだろう。」また，二刀流剣法も，鄭芝龍と鄭成功は平戸で学んだ。（松浦熙のコメント）

28　「芝龍は一旦，節操を失う。世間の蔑むところであるものの，彼は当初，大胆で思慮深く計略に富んで聡明であり，常人に比べて抜きん出ていた。時として，人々は彼を戚継光になぞらえることもあったという。拙者が屋烏の私愛を語るならば，すなわち鄭氏父子はともに我が池の中の蛟龍なのだ。」（松浦熙のコメント）

29　稲垣其外『鄭成功』（台北：台湾経世新報社，1929年 1 月），634ページ。国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3463806）。

30　『アジア資料通報』38（４）（東京：国立国会図書館専門資料部アジア資料課，2000年 8 月），p.2。この『アジア資料通報』38（４）によると，『台湾経世新報』は1911年 4 月に『台湾商事報』として創刊し，1924年に改名した。

31　稲稲垣其外『鄭成功』〔通俗台湾歴史全集 第 2 巻〕（台北：台湾通俗歴史全集刊行会，1930年10月），68ページ。

テーマ2

「香港史」とは何か―歴史と語りを振りかえる

講演者：倉田　明子（東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授）
コメンテーター：菊池　秀明（国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科 教授）

○司会者：それでは，これよりテーマ 2 「『香港史』とは何か　歴史と語りを振りかえる」を開始させていただきたいと思います。テーマ 2 につきましては，東京外国語大学の倉田明子先生にご講演いただきます。また，コメンテーターは国際基督教大学の菊池秀明先生にお努めいただきます。簡単にお二人のご経歴をご紹介いたします。

まず，ご講演いただきます倉田先生は埼玉県の生まれで，東京大学教養学部卒，同大学院総合文化研究科博士課程満期修了，博士（学術）の学位を取得されました。東京外国語大学総合国際学研究員講師を経て，現在，准教授でいらっしゃいます。2003年から2006年を香港で過ごされ，専門は中国・香港近現代史で，著書に『中国近代開港場とキリスト教』，共著に『ようこそ中華世界へ』，共編著に『香港危機の深層』ほか，訳書に魯金『九龍城寨の歴史』がおありです。

続いてコメンテーターをお勤めいただきます菊池先生は，1961年生まれ，早稲田大学第一文学部を卒業後，東京大学大学院人文社会系研究科を修了，博士（文学）の学位を取得されました。中部大学国際関係学部専任講師，助教授を経て，現在は国際基督教大学の教授でいらっしゃいます。中国南部でフィールドワークを基にした歴史研究を進めておられ，太平天国に関する著作のほか，講談社学術文庫刊行の『ラストエンペラーと近代中国』などの著書がおありです。

それでは，倉田先生，菊池先生，どうぞよろしくお願いいたします。

○倉田：ご紹介にあずかりました，東京外国語大学の倉田と申します。今日はよろしくお願いいたします。

私は香港史をテーマにお話しようと思っています。私の前にお話しくださった若松先生は「鄭成功の描かれ方」という具体的なテーマで，史料も示されながら非常に歴史学らしい発表をしていただいた訳ですが，私の場合は，「香港史」という漠然とした大きなテーマです。漫談的になってしまうかもしれませんので，若松先生の後というのはとても恥ずかしいのですが，ご容赦いただければと思います。

先ほどのご紹介にもありましたが，私は最近は中国と香港の近現代史が専門です，と自己

紹介をしています。ただ，もともとは中国の太平天国をテーマに歴史研究の世界に入りました。今日，コメンテーターをお願いしている菊池先生は日本の太平天国史研究の第一人者で，私は本当に昔からお世話になっています。とはいえ，太平天国研究といっても，私は香港史にかなり近い分野の研究――香港に滞在したことがある太平天国関係者の研究です――をしていました。その関係で香港で史料を集めるようになったのが香港との最初の関わりです。その中で香港の歴史を研究対象とすることも出てきましたし，さらにたまたま香港に住むという経験もしたことで，結果的に最近は歴史学者のわりには現代の香港の様々な運動を担った人たちとも関わるようになりました。2010年代以降の香港では，雨傘運動に代表される大規模な市民運動もありましたし，2019年は非常に深刻な反政府運動もありましたが，そうしたところに私自身もそれなりにコミットしてきたということです。その意味では，今日は直接現在の香港の話はしないつもりですが，そこにつながる背景をある程度お話しできればと考えています。

複数の「香港史」

研究対象としての香港史ということでは，ここ数年で 2 冊，翻訳書を出しています。香港大学の歴史学科で教えるジョン・キャロル先生の『香港の歴史』を2020年に共訳で出版し，またつい最近（2022年10月），『九龍城寨の歴史』という訳書も出しました。九龍城というのは，ご存じの方もいらっしゃると思いますが，香港でとても有名な歴史的な場所で，その誕生から解体までの歴史を述べたものです。こうした翻訳の仕事の中で私なりに香港史について考えたこともあり，今日はそのこともお話ししたいと思っています。

一言で香港史といっても，そもそも「香港」とは何を指すのかということからして，実は結構難しいところがあります。香港というのは，中国の南の端にある広東省のさらに南端にあります。非常に小さい地域で，東京都の半分ぐらいの大きさしかありません。中国の全体から見たら，点のような場所ですが，ここが歴史的には注目されてきたわけです。その理由というのは 1 つしかなくて，ここがイギリスの植民地だったからです。香港は，植民地になったから「香港」と呼ばれることになるので，「香港史」と言った場合に，この植民地化ということを抜きには考えられません。ただ一方で，香港史の始まりイコール植民地になった1842年，でいいのか，という議論もあります。1842年以降「香港」と呼ばれる地域自体はそれ以前からずっとあったわけですから，植民地になる前のこの地域の歴史をどう捉えるかということをやはり考えざるを得なくなってきます。

その結果，現在に至るまでさまざまな形での香港史が語られてきました。大まかに分類すると 4 つぐらいの類型があると思っています。一つは，イギリス帝国の中の植民地としての香港史です。これは植民者たるイギリス人が語った歴史でもあり，当然のこととして，香港がイギリス植民地となった1842年から歴史が始まります。一方で1997年の香港返還が近づい

てくる中で，中国の学者たちがさかんに香港の歴史を描くようになります。こちらは，香港は中国の一部であるという歴史観にもとづいた，中国史の一部としての香港史という視点が強調されることになります。もう一つは辺境としての香港史という見方です。これは，先ほどの『香港の歴史』を書いたジョン・キャロルさんが，もう少し専門的な歴史研究の本として発表した『Edge of Empires』という本に代表されます。端的に言うと，イギリス帝国と中華帝国それぞれの辺境という形で香港を描くというものです。そしてもう一つが，「ローカルな」と私はあえて言いますが，香港の人が語る香港史です。「香港人の香港史」という言い方もありますが，要するにそこに住む人たちにとっての，香港と呼ばれる地域の歴史もあります。こうしたいくつかの「香港史」があるなかで，歴史学者でも，あるいはそうでなくてもいいのですが，香港の歴史を語るときにはいずれかの「香港史」の捉え方ないし立場を選択することになりますし，選択した時点で何かしらの政治性を帯びてしまうようなことにもなります。このことは，香港が現状に至る過程の中でどうしても避けられなくなっていると思います。

大国の歴史の一部としての「香港史」

そしてそれぞれの歴史――「植民地香港史」「中国の香港史」そして「ローカルな香港史」――には，それぞれの語り方があります。イギリス帝国の一部としての植民地香港史ということでは，ある種決まりきった言い方があって，香港というのはイギリス人が来る以前は荒れ果てた孤島であったとされます。最初に割譲されたのは香港島だけですので，香港島がそういう島だった，ということです。何もなかったところにイギリスがやって来たことで植民地として繁栄をする，という語りです。香港は後年，中国への窓口として特別な場所になり，経済的にも繁栄していくわけですけれども，それはイギリスあってのこと，という極めてイギリス帝国視点の香港史です。これが一番メジャーな香港史観として存在してきました。

一方で 2 番目の中国の一部としての香港史は，先ほども少し述べましたけれども，1997年の香港返還と関係があります。植民地としての香港は，割譲地（香港島と九龍半島）と租借地（新界）から成り立っています。租借地の期限が切れるのが1997年でしたので，97年以後の香港をどうするかという議論は，イギリスと中国の間で1970年代から始まります。そして1984年に，1997年に香港全土を中国に返還することが決まります。これを契機に，祖国に復帰する香港をきちんと歴史的にあとづける必要があるということで中国本土でも香港研究が盛んになってきます。このなかで出てきた語りというのが，香港は中国固有の領土であるというものです。そもそもあの土地は中国のものであり，そこにアヘン戦争という，初めて西洋列強に負けた戦争によって植民地として割譲された場所が香港島です。列強によって半ば植民地にされるという非常に屈辱的な近代を経験した中国にとって，香港はその屈辱の歴史を象徴する場所であり，97年の香港返還は，その香港が屈辱の歴史を乗り越えて祖国に復帰

するという物語でもあるのです。ですから，香港が中国領土であることを自明とする語りになります。

植民地香港史にせよ，中国の香港史にせよ，その語りはきわめて政治的であり，イギリスないし中国という国家を背負うことになります。

ローカルな「香港史」の語り

これらに対し，「ローカルな香港史」の語りも出てきます。これは，そこに住む人たちが自分の住む地域，あるいは生活の歴史として香港史を捉えるという見方です。例えば，香港周辺を含む中国南部沿岸には，蛋民と呼ばれる水上生活をする人たちが長く暮らしてきました。彼らは差別されてきた人たちでもあり，例えば科挙を受ける資格がないなど，一般的な中華帝国の構成員としては認められてこなかった人たちです。でも香港という土地にとっては，そういう人たちこそが先祖であると主張する人もいます。あるいは「海賊」に対する見方もそうです。先ほどの鄭成功の話ともどこかでかぶってくるかもしれませんが，海上で国家権力に縛られないで生きていた人たち，時に海賊行為を働くような勢力が香港を拠点にしたという伝説が香港にはいくつもあります。近年ではそういう人たちこそが香港の最初の住民である，という視点で香港史を語ろうとする言説もあります。あるいは，植民地になったあとのことにしても，村とか，あるいは都市化されていく街の歴史を掘り起こしていくという形で語る香港史も出てきます。

この「ローカルな香港史」の中で非常に重要なテーマが，香港人アイデンティティーです。「植民地香港史」であれ，「中国の香港史」であれ，これは誰かに支配される他人の土地です。でも，そこに住む人が，ここがわれわれの家なのだと感じ始めるのはいつかということは，香港史の文脈の中ではすごく重要です。一般的には，香港人アイデンティティーといわれるものは1970年代ぐらいに香港の人たちの中で共有されるようになったとされます。香港の住民たちの大部分がそう思うようになったといわれる時期です。それはおそらくそうなのですが，ただ，香港という植民地ができ，そこに定住する人たちというのは，当然もっと前からいます。そういう人たちは中国系の香港住民の中でもエリートたちの場合が多いのですが，その中から，香港に独自の価値を見いだす人たちが，実は戦前，1920～1930年代には現れていた，とする議論があります。ただ，こうした主張をすることも，たはりある種の政治性を帯びてしまいます。つまり，植民地香港の時代でも，その植民地香港にアイデンティティーを持って「中国大陸とは違う」と感じた人たちがいたということですので，それはやはり特に「中国の香港史」という立場の歴史観から見れば，非常にセンシティブになり得ます。

ローカルな「香港史」の発見

ただ，このローカルな香港史への意識，あるいはローカルな香港史の発掘という行為自体，

私自身が見ていた限りでは，実は返還前後に盛んになってきます。これが一つ，面白いところだと思います。返還という事象が，香港に住んでいる人にとってどういう意味を持ったかということを示していると思うのです。これは時々お話しするエピソードなのですが，2007年，つまり返還10周年の年にたまたま香港に行った時に，バスの中のモニターに番組が流れていて，そこで香港の芸能人たちが返還10周年について語り合っていました。その中ですごく自然に彼らの一人が「返還というのは香港人にとっては，本当の意味で香港人になれたこと」というふうに言っていたんです。それは特にセンシティブな発言でもなく，そういうような感情があったということです。つまり，イギリス植民地ではなくなり，香港特別行政区になる，中国領になるということは，（広東語を話す香港人が行政トップになったということも含めて，）香港人にとって「やっと堂々と香港人を名乗れるようになった」というような感覚があったということです。そこが非常に印象的でした。

私自身はちょうど香港返還のすぐあとの時期に研究を始めました。学部を卒業し，修士課程に入ったのが1999年です。研究テーマは太平天国でしたが，香港で史料を探すという形で香港に関わっていく中で，ローカルな香港史の発展を間近で見てきたという感覚を持っています。印象的なのは，香港では郷土史家とでも言うべき人たちがとても活躍していたことです。そこには教会関係者，宣教師や牧師も結構います。そもそも，（もちろん「植民地香港史」ではありますが）香港史の先駆けとも言える書物を最初に書いた E. H. エイテルという人は，宣教師です。こんな時代から香港に定住をして，香港社会に目を向けた人というのは，商人たちよりも教会関係者が多かったのです。また，カール・スミス，李志剛といった方々は現代の人ですけれども，彼らもやはり教会関係者です。香港の教会の歴史を通して香港史に関心を持っていくという流れがあったように思います。

また，先ほどご紹介した『九龍城寨の歴史』を書いたジャーナリストの魯金という人がいます。魯金はペンネームで，本名は梁濤といいます。この方は1970年代の終わりから80年代，つまり香港が返還されることが決まってくるあたりから，とても熱心に香港の郷土史を掘り起こしていきます。香港史のエピソードを集めた本をシリーズもので出したりもします。私が香港の歴史を知ろうと思った時に最初に触れたのは，この梁濤編さんのシリーズものでした。その最初の一冊が，実は『九龍城寨の歴史』で，それの日本語訳が今年出たことになります。またもう一人香港史の文脈ではとても有名な方で高添強という郷土史家もおられます。特に肩書もなく，ただ本当に香港の歴史に非常に詳しくて，いろいろな史料をご自分で探して，写真などもたくさん収集している方です。

それから，丁新豹という方もおられます。郷土史家と言ってしまうと失礼かもしれません。香港中文大学の歴史学科を卒業して，ずっと歴史研究をしてきた方です。ただ，香港では，歴史学研究者は香港のローカルな研究をしていると出世できないという現実があります。英語で英語の世界に通用する論文を書かないと，香港の大学では生き残れないんです。そこは

植民地だから，としか言いようがありません。ですから，丁新豹さんはそういう道には進まず，大学を卒業してからは香港政府の文化系の仕事とか，歴史博物館の館長をされます。そういう立場にあったからこそ，香港の歴史を研究することができた方です。こういった方々が香港史を発掘し，史料や写真，あるいは口述の記録といったものを収集し保存してきました。こういう方たちは，丁さんをのぞけば，いわゆるプロの歴史学者，歴史研究者とは違う立場の方たちです。

実証研究の難しさ

一方，香港の大学に職を持つような歴史研究者が香港史研究をしてきたかというと，最近までそうしたことはありませんでした。先ほども言いましたように，香港の大学では，中国語の史料を使って中国語で書くという研究をしていては，大学の職を得ることが非常に難しかったからです。この10年ほどでようやく徐々に変わってきた感じがしますが，長らく，きちんと歴史学の訓練を積んだ歴史学者が香港の地場の歴史を研究するということは非常に少なかったわけです。その結果として生じた一つの問題が，歴史研究として生み出されるべき成果と，「語り」としての歴史の乖離（かいり）です。このことを今回私は，『九龍城寨の歴史』という本を翻訳する中で強く感じることがありました。非常に苦労した部分でもありますし，悩んだ部分でもあるのですが，その事例を 1 つだけご紹介しようと思います。

この本は，九龍城寨の始まりから現代までの歴史を通史的に書いたものなのですが，そこにアヘン戦争直前の話も出てきます。もともと，この九龍城寨というのは防備のための簡素な要塞があっただけで，その後に城壁を築いて城寨と呼ばれていく場所です。まだ要塞だった時代の話で，この先は清朝の（漢人の部隊である）緑営という軍隊の話になるのですが，複雑なのでかいつまんでお話しします。その緑営の参将という立場だった頼恩爵という人が出てきます。この人は地元の広東省の出身で，後々には広東の水軍のトップになりますので，軍人として非常に優れた人物です。参将というのは武将の位としては中堅レベルでそれほど高くはありませんが，この人はアヘン戦争の前哨戦になるような香港周辺で起きた戦いで活躍をして，その功績で副将という位に昇格します。それとほぼ同時期に，九龍寨を管轄していた「営」という緑営の部隊の位も「協」に昇格し，さらに「協」を管轄する副将は，戦略上重要な地点となってきた九龍寨に常駐するように配置換えするということも行われました。

この，頼恩爵の昇任と，この地域の「営」が「協」に昇格した，という 2 点は史実です。裏付けもあって，アヘン戦争の当初の責任者である林則徐が書いた上奏文だとか，あるいはそれに対する皇帝の上諭が残っています。ただ，この二つの事象の間を埋めるストーリーは史料には書かれていません。『九龍城寨の歴史』の著者の魯金は，ここを，かなり想像を交えて，自由にストーリーを組み立てて，頼恩爵という人物を中心にストーリーを描いています。つまり，頼恩爵が副将に昇格したので，その頼恩爵を九龍寨にとどめたかった林則徐は，

この地域の部隊を営から協に昇格させたのだ，と断言的に書いていました。ここを翻訳しながら，最初は史料も引いてあったので，そんなものかなと思って訳していたのですが，最後の確認のところで編集者の方とも一緒に調べたり考えたりするうちに，どうも違うのでは，ということになりました。このストーリーの裏付けがどうしても見つからないのです。そもそも，この九龍という場所は非常に小さい所です。香港そのものがきわめて小さい所ですが，アヘン戦争というのは広州の辺りが最初の主戦場になります。九龍は，広州への入り口ではありますが，かなり離れています。そしてアヘン戦争そのものは，戦場が広州からさらに天津まで広がっていく，非常に大きな戦争なわけです。その中でこの九龍という 1 点に関しての戦況が，重要な史料，つまり皇帝のもとまで届くような史料にそういくつも残るわけがないのです。参将という位もさほど高くはないので，この人物個人についての当時の事跡が分かりやすく史料に残っているわけでもありません。逆にいうと，頼恩爵という人は魯金が言うほど，林則徐がそこまで取り立てて重要視するわけもないぐらいの人物であり，九龍という場所も，アヘン戦争全体から見れば取るに足らない地域であるわけです。けれども，ローカルな香港の歴史だけを見て，さらには史料の使い方という点で歴史研究者ほど厳密でなければ，このようなストーリーを語ってしまうということも出てくるわけです。ただ，これを翻訳として出すとなった場合，やはり裏付けが取れていないところについては，そのまま訳して終わりにするわけにはいかない，ということになり，最終的に日本語版ではかなり削除したり，加筆したりしました。こうしたことを通して，歴史学として考えた時には，やはり全体を通してどこまで整合性がとれるかという点にも注意して歴史を書かなければならないのだけれど，香港という場所，あるいは九龍という場所だけを見て語ってしまうと，こうした落とし穴にはまってしまうこともあるのだと思いました。もちろん，郷土史家の方々の仕事は非常に貴重ですし，語りとしての歴史というのもとても大事だと思います。人々の感情に訴えるものがないと，やはり歴史は無味乾燥になってしまいますから。一方でその中でもきちんと合理性のある歴史とは何かというようなことも考えないといけないな，と，最近感じた次第です。

香港史研究の現在

最後に，香港史研究が現在どうなっているかということについて，お話したいと思います。この数年の間に香港では様々なことがありましたが，その中で，改めてローカルな香港史への関心は高まっていると感じています。さまざまな現実の政治運動に携わってきた人たちの中では，特にデモ側に立った人たちの意識というのは，自分たちが大切にして守ろうとした「香港」という場所に向いてきました。香港というものはどういう土地なのか,「われわれの」歴史として改めて問い直したいという動きが強まったように思います。その中で，より多様な香港史の可能性というのが出てきているように思います。

例えば，マイノリティーの人たちへの注目が集まりました。この場合のマイノリティーというのは，中国系，つまり漢人系のマジョリティーに対してのエスニック・マイノリティーです。例えば，南アジア系の人たちは香港でも相当な規模の歴史あるコミュニティーを持っています。でも，彼らがこれまで「香港人」と見なされてきたかというと，そうとは言えません。ところが，この数年のいろいろな動きの中で，マジョリティーの「香港人」たちが一つ気づかされたこととして，彼らが「香港人，香港人」と言う時に，それは誰を指すのかという問題がありました。香港にずっと長らく住んで広東語も話すような，でもエスニック的には他者と見なされる人たちは「香港人」なのかということです。デモ活動を支持する南アジアルーツの人びとが現れたとき，このことに気づかされたわけです。あるいは，香港には日本人もそれなりにコミュニティーがあります。やはり最近，香港の日本人の中でも，自分たちの歴史を発掘する動き，日本人墓地の調査などを進めていて，それを NHK が報じたりもしていました。

また，歴史ある建築や，香港らしい景観への愛着も強まりました。例えば，香港といえば，道に張り出した派手なネオンサインが有名です。でも，このネオンサインが最近，安全性の問題を理由に次々と撤去されています。私も2020年以来，2年以上香港に行っていませんが，今度行ったら，街の風景もかなり変わっているかもしれないです。こうした失われていく街の景観を懐かしんだり，可能であれば保存したり，あるいは歴史として書き残していく，という動きが強まっています。

また，抗戦史を振り返るというのも，最近のブームです。1941年12月から1945年9月まで日本が香港を占領した時期がありますが，その時期への注目が高まっています。これは必ずしも「反日」というのではなくて，ある種の抵抗の歴史の再発見というようにも見えます。ローカル史への関心という点では非常に面白い現象だと思って見ています。ただ，心配なところもあります。検証や実証が不十分なまま，かなり想像を交えて「史跡」や「歴史」を語っているところもあるように思います。語られた「歴史」がそのまま一人歩きしてしまって大丈夫だろうかと心配に思うこともあります。

また一方で，この数年の動きの中で中国の共産党政権からの影響も強まっています。いわゆる中国式の愛国史観といいますか，先ほど述べた「中国の香港史」の歴史観に近いですが，それがさらに政治性を強めながら教育の中に折り込まれてくるということも，今，実際に起きています。これはこれでまた別な課題です。さきほどのローカルな歴史に注目するのとは方向性の違う歴史の「語り」が，香港の中で広がりつつあるように思います。

そういう中で，やはり実証的な歴史研究がますます重要になっているのではないかと思います。でも，それがなかなか難しくなってきてもいます。香港の大学で香港研究をする若手は増えてきていましたが，今後そういう人たちが香港の中でそうした研究を続けられるのかは不透明です。実際のところ，香港の政治環境の変化の中で，香港を離れる人が増えていま

すが，学者たちもかなり海外に出ています。私の知っている中でも何人も香港を離れた人たちがいます。ただ，彼らが海外の大学で香港研究の拠点を立ち上げるというようなこともあって，そういう人たちが，これから香港史研究を継承，あるいは発展させていくことにもなるのかもしれません。

そういう中で，最後に日本についても触れておきます。私自身も日本で香港史研究しているわけですが，少し距離はありつつ，でも欧米よりは近い場所にある日本にいるからこそ，できることもあるのではないかと最近は思っています。日本人，あるいは日本にいる香港人，中国人の中からも，香港に関心を持って研究する若手が増えています。日本だからこそできる研究というのを，私自身もこれからも考えていきたいと思っています。

私の話は以上です。どうもありがとうございました。

○菊池：倉田先生，どうもありがとうございました。私はコメントすることになりました国際基督教大学の菊池と申します。1961年生まれです。ということは，鄭成功の上陸300周年に生まれた。鄭成功とも縁があるんだなと思って，楽しくお話を伺っていました。時間もありますので，早速。

倉田先生のお話を伺いながら，私もいろいろ考えるところがあったんですけれども，まずは私なりの言葉でこの香港の歴史を語る難しさというものを復習してみました。前半 2 つのところを言い換えてみたのですが。

一つは，やはり中国におけるヨーロッパというふうに香港を見る見方。これは先ほど紹介のあった宣教師が本を書いた時に本のタイトルにしていたかと思いますが，近代文明の移植と受容に重点を置くような見方。当然，香港がイギリス統治したのは正しいのだという前提なので，植民地統治のいろいろな実態に目を背けがちになりがちだというのが一つの見方だと思います。

もう一つ，すごくざっくりとしたまとめ方で申し訳ないのですが，雪恥史観という言葉を使ってみました。雪恥って国の恥をそそぐって，これは蒋介石が日記の中で散々使ったものの言い方ですが。一言で言うと，近代の中国，アヘン戦争から始まり日清戦争以降，ずっと滅亡の危機に立たされた，中国が，それを「回復しなきゃいけないんだ」。日中戦争の被害の記憶というのがあって，台湾を含めてだと思いますが，「あるべき中国の国土の再統一」，「統一というのが中華世界の復興に不可欠だった」というふうに考える。これは今の中国で語られている考えにつながっていくと思います。

今，倉田先生はこの 2 つの視点以外に，例えば辺境史，地域史，生活史，ミクロな中に香港のアイデンティティーの根っこを探るような方向があり得るだろうという話をされたんですけれども。辺境史というのはすごく面白くて，やはり台湾であれ，香港であれ，中華世界の辺境地域なわけですが，僕は，やはりこの香港と台湾を包括するような歴史の見方って提

示できないだろうかって，すごく自分自身，僕自身は実は大陸のほうが専門なんですが。香港や台湾行くと，すごく親しみ感じるので，その地域も含めて考えることはできないだろうかということで，少し過激かもしれませんが，こういうことを考えてみました。越境。これ，辺境を越えていくわけですが「越境と抵抗の南中国」というような視点で考えてみました。もともと香港と台湾というのは地続きの広東，香港，台湾は台湾海峡挟んで福建省と面していますから，要は広東や福建およびその隣接地域の地域全体の中の一部なんです。言ってみれば，これは南中国，華南地方に位置していると言えると思います。この華南地方というのは歴史的に見ると，実は漢人，今の漢族の祖先たちが北からやってきて，広東人であれ，台湾人のベースになる閩南人であれ，北からやって来て，もともといた先住民を駆逐しながら，いわば内地化していった，そういう歴史を持っている地域，共通の体験を持っています。こうやって人々がやって来た場所，新しく中国になっていった場所なんですけれども，この華南の人々というのは，ずっと楽しくやってきたというよりも，いろいろなトラブルある中で時に公権力の抑圧から逃れたり，移動や越境を繰り返すというような歴史を背負ってきたと僕は考えています。こういう南中国の歴史の中で，例えば今回お話のあった九龍城寨，こういう香港の歴史，あるいは香港のミクロな地域の歴史というのを捉え直すとしたらどうなるだろうかというのを，ちょっとざっくりで申し訳ないんですが，やってみたいかと思います。

実は九龍城寨というのは広東省の沿海に置かれた海防拠点の一つなんです。他にもいろいろなお城があって，その一つの広海寨城というのがあります。すぐ西側の要塞だというふうに考えてください。これがどこにあるかというと，広東西部の台山市，昔は新寧県といったのですが，そこに置かれていた海辺の城で，九龍寨と同じく沿海の防衛拠点だったんです。こっちの広海寨城というのは，実は19世紀の半ばに歴史の舞台になりまして。何かというと，この地域で住民同士の抗争起こるんです。土客械闘と言います。具体的には，ここにいる広東人，広東の西部にいるので四邑人（セイヤップイェン）というふうに言うのですが，この人たちと後発移民の客家の人たちが武力抗争をします。しかも13年間，これはもう内戦で。非常に激しい戦いになります。最後，多勢に無勢で客家の人たちは追い詰められていくんですが，最初にそこで立てこもったのが広海寨城なんです。広海寨城，どうなるか。清朝の正規軍の攻撃を受けて壊滅させられています。客家の人たち，全滅させられてしまうわけですね。もう一つ，生き残った人たちが最後に立てこもって隔離されるような形になったのは，実は赤溪という場所で，地図でちょうど香港とはアモイを挟んで西側ということになります。この赤溪，これは1996年に撮った写真ですが，それはそれは最果ての貧村でした。これが広東だというのは信じられないようなところ。特徴的なのは，この村の裏山にある岩山です。これってちょっと見覚えありませんか。香港から深圳に向かう鉄道路線がありますが，あれに乗っていると，ずっとこういう調子の裏山が連なっているんですよ。地形的に一緒で。何が言いたいのかというと，この赤溪の風景というのは「もし香港がイギリス領にならなかっ

たら，こうだった」ということなんです。非常に貧しい漁村だということがわかるかと思います。ここが実は最後，先ほどお離しした武力抗争で後発移民の客家の人たちがそこに追い詰められて，清朝の正規軍から攻撃を受けるということになるのですが，その時の様子を描いた，これ，皇帝に届けられた地図なんです。皇帝にこれから弾圧しますよといって届けた地図で，一番西の端に壊滅させられた広海寨城の写っているのですが，3 つの丸い矢印があって，ここが赤溪なので，何と賊寨と書いてあります。賊寨。反逆者の砦だと。だから，つぶすんだと。いわば軍事弾圧を正当化するための地図なんです。賊寨。賊，反逆者。今でいうと「暴徒」だということになるかと思いますが，こういうふうにやれてしまう。結果的にはこれは辛うじて調停がなされて，彼らはここにいわば封じ込められてしまう。隔離でここに押し込められるような形になるのですが，その後，彼ら実はキリスト教に入っていくんですよ。客家の人たち。今お話ししたように赤溪はもう辺境の漁村。香港の新界とほぼ同じ風景だと考えてください。ここに最終的に隔離され「おまえたちはここに住め」って強制的に住ませられる。半分流刑っていっていいと思います。

その客家の人たちはそうなった後，実はマカオが目の前にあるので，ここから来た宣教師によってカトリックに入るんです。その結果，どうなるかというと。ここ，僕，1 度行きました。行って，彼らの家系図とか見せてもらったのですが。カトリックの司教が北京の皇帝に働きかけて，われわれを苦しみから救ってくれたと書いてあるんです。これ，今日のお話で「ウソをつきがち」ってことになると，明らかに「ウソ」なんです。というのは，械闘が終わった後にカトリックはここで伝道をし始めますので，事実は逆なんです。決して司教が圧力をかけたり，19世紀後半はそういうことがたくさんありましたが，圧力をかけて救ったというのは彼らが作り出したフィクションなんです。だけれども，そういうフィクションを結局作る。だから，「ウソだから意味がない」というわけではない。どんなフィクションでもそれが語られる時には，そこに込められた意図とか意味とかがある。彼らの場合はどうなのだろうか。結局，香港がヨーロッパ文明の受容の地であったように，彼らもヨーロッパの文化であるキリスト教というのを受容していくことになりました。それはある種，香港とこの赤溪の客家の人たちってパラレルな関係だと思うんですが，自分たちがまず王朝の政府から軍事弾圧受けてつぶされようになった，その記憶の一つの伝承の形なんです。この時の抵抗がすごくて，最後，砲兵隊がやって来て，ガンガン大砲を撃ち込むんです。大砲を撃ち込まれてどうするかというと，女性や子供が着弾地点にバーッと駆けていって，砲弾から導火線を抜くんです。砲撃を無効にするんです。これってすごく既視感のある風景ですよね。2019年の香港デモの時に香港警察が催涙弾を水平射撃したじゃないですか。目に当たって傷ついた女性もいたし，黒い服を着た若い子たちが着弾地点に駆けつけて，ふたをして催涙弾の煙が広がらないようにした。あれと同じことが実は時間をさかのぼって発生していたんです。歴史は繰り返されたと言ってもいい。結果的に赤溪や香港の人たちは，自分たちは王朝

から捨てられた民であるという意識を持つようになった。こういう認識って実は南中国の移民たちにはかなり共有している部分があって，強い不信感みたいなのを少なくとも中央政府に対して持っているというところはあります。この棄民として扱われたことへの一種の抵抗，無言の意思表示がキリスト教への入信だったいうふうに見ることができます。

そうやって考えると，香港で洋近代的な文化が定着していったというのは，そういう文脈で考えられる部分もあって，香港の歴史というのは，これは台湾もそうだと思いますが，要は南中国の歴史の一部として考えると，いろいろ一つ一つの意味が広がっていくんじゃないかというのが僕のコメントです。以上です。

○司会者：倉田先生，菊池先生，ありがとうございました。それでは，以上をもちましてテーマ 2 を終了させていただきたいと思います。テーマ 2 のご質問につきましては，全体討論の際にご返答いただきたいと思っております。

全体討論

若松　大祐・倉田　明子・細見　和弘・菊池　秀明
進行：金丸　裕一（立命館大学社会システム研究所所長／経済学部 教授）

○金丸：それでは、これより本日ご発表いただきました若松先生、及び倉田先生、そしてコメンテーターの細見先生と菊池先生を交えた全体討論を開始いたしたいと思います。

こんにちの日本の学界における台湾研究や香港研究を牽引されるお二人の中堅研究者の報告に対して、60代の学者がこれまでの蓄積にものをいわせてコメントするという構図が、はからずも二つの報告に共通するものとなっています。そして、特に今世紀10年代以降の台湾と香港を取り巻く状況に思いを馳せますと、他にもっと議論すべき問題が山積されているだろうといったご指摘が生じるやもしれません。しかしながら、学生時代から研究対象としている地域に馴染み親しみ、かつ長期間におよぶ滞在経験を持つお二人の報告でありますから、当然ですが現状について強い意識を持たれている中での思索の成果です。

そして、あえて歴史学の方法論を用いてホットな場所を淡々と分析することによって、熱くならず感情的にならず、冷徹に現在の問題の背後にある経路依存性について、非常に雄弁に語ることができるのではなかろうかと考えております。それでは、どなたからでも構いませんので、ご発言をお願い申し上げます。

○石川亮太：ありがとうございます。立命館大学に勤務している石川と申します。実はこの会場のすぐ近くに住んでいるのですが，そこにこのように高名な先生方がおいでくださり，学術的な話をしてくださるということに大変感動しまして，楽しく伺いました。どうもありがとうございました。

倉田先生のお話について質問をさせていただきたいと思って手を挙げました。私は朝鮮半島の歴史を専門としていまして，その関係で思いついたことをお尋ねさせていただきます。今日は香港の歴史や香港人のアイデンティティーについてのお話をしてくださいましたが，その中で，冷戦の歴史というのはどういうふうに位置付けられてるのかということをお聞きしたいと思いました。というのは，韓国の場合，韓国人のアイデンティティーの形成のような問題を考える時に，民族主義と反共主義というのがとても重要な 2 つの要素になると思います。民族主義だけではなくて，冷戦の最前線に立たされていたという意識が韓国の場合はすごく大きなインパクトがあったと思うんです。多分，台湾もそうだろうと想像しています。では，香港はどうなのかということで，そういう点でお気づきのことがあったら教えていただきたいと思いました。

それと少し関係すると思いますが，1940年代後半の国共内戦にあたって，香港に逃げてき

た人たちがいたと思います。そういう人たち，避難してきた人たちというのは，香港人の歴史の中でどういうふうに位置付けられてるのかということもちょっとお聞きしたいと思いました。というのは，韓国の場合に北からの避難民というのは，韓国人のアイデンティティーの形成というような問題を考える時に大きな意味があると思います。ある場合は生きている共産主義の被害者というな感じで，反共主義の宣伝の中で大きな役割を果たすこともあるし，逆に南北関係が良くなってくると，北との架け橋のような感じで避難民の方たちが取り上げられたりもするというように，なかなか複雑な存在だと思っています。それでは，香港の場合に大陸から避難してきた人たちがどういうふうに位置付けられてるのかということを，もしご存じであれば教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○倉田：石川先生，ご質問どうもありがとうございました。香港の戦後のアイデンティティーを考える時に，確かに冷戦の要素は大きいと思います。ある意味，香港は冷戦の最前線みたいなところがありました。つまり，大陸の共産党に対して西側の最前線であったので，やはり香港の人たちの中には中国共産党政権に対する強い反発があったように思います。さらに，1960年代に香港は高度経済成長し，その過程で経済的にも自信を持っていきます。共産党政権下の中国とは違う，発展した豊かな香港という土地に独自のアイデンティティーを育んでいきます。その中で，今後半でおっしゃってくださった，香港に逃げてきた人たちの存在は非常に大きいです。香港の戦中戦後の歴史を振り返ると，1941年末に香港は日本軍の占領下に入ります。戦争末期には空爆もされますし，日本占領下では相当なひどい目に遭います。占領前は200万人近かった人口が，占領中には日本軍の政策で半ば強制的に域外に追い出され，そこに戦況の悪化による離脱も加わって，日本敗戦時には香港の人口は60万人にまで落ち込みました。その後中国大陸では内戦が起こり，1949年には中華人民共和国が成立しますが，この間に香港では急激に人口が増加します。ほとんど難民のような形で，年間50万とか100万とかという単位で避難民が押し寄せたのです。ですから，戦後の香港というのは，ほとんど大陸から逃げてきた人たちで構成されているという，という少なくともそういうイメージがあります。彼らは戦乱であるとか，あるいは共産党政権の成立，あるいはその後のいろいろな政治的動乱を避けて香港に逃れてきた人たちです。香港人の戦後のアイデンティティーを考える上では，大陸から逃げてきたというのがある意味，共通の記憶になっているという点は非常に重要です。こうした記憶が根底にあってその後の共産党政権との関係がありました。例えば1989年の六四天安門事件を追悼するということを香港は毎年やってきたわけです。これは台湾でも行われてこなかったことですが，香港だけは毎年ずっと追悼集会を開いてきました。それは，やはり逃げてきた人たちの DNA ではないですけれども，そうした感覚が非常に強かったからだと思います。その意味で，非難してきた人たちと香港アイデンティティーは，深く関わっているのではないかと思います。

○金丸：どなたかほかに，いかがでしょうか。Zoom 参加の方でご質問ある方は，画面下部メニューの Q & A から質問してほしい旨の案内が出ておりますので，ぜひどんな内容でも構いませんので，チャットでお願いしたいと思います。そうしたら会場，いかがでしょうか。では，宮内先生，お願いします。

○宮内肇：先生方，お話，大変勉強になりました。ありがとうございました。私，宮内と申します。立命館大学文学部に所属をしております。若松先生と倉田先生にひとつずつ，おうかがいしたいことがあります。

まず，若松先生のご報告について，資料 3 頁の鄭成功に関する年表のところで，先生のお話では，中国大陸では国家として鄭成功が研究されていく流れがあるのに対して，台湾や日本ではそうではなく，民間あるいは地域振興の素材として取り上げられていく，ふたつの流れがあるように理解しました。そのなかで私が気になったのは，年表では，1990年代以降に平戸と台南とのあいだで相互にまではいかないまでも，互いに記念行事を行っているようにも読み取れます。平戸市と台南市とにそもそも交流協定のようなものがあるのかは知りませんが，こうした交流のなかで鄭成功の文化を持続させていこうといった，言い換えれば，これもある意味でのパブリックな文化復興だと思いますが，このように理解ができるのか，お話をうかがいたいと思います。

つぎに，倉田先生のお話についてですが，大変，興味深く拝聴しました。「香港人」としての自分たちの土地，あるいはローカルな香港史の意識が1997年の返還以降に盛り上がり，そこから10年後に自然に語れる「香港人」のようなものが生まれてきたというお話は，「まさに，そうだな」と感じました。

一方，菊池先生のコメントを聞いていて，例えば，香港の人たち，あるいは香港社会で最も話されている言語はいわゆる「広東語」だと思うのですが，この言語の地域空間を菊池先生は「南中国」と表現をされました。ならば，彼ら（香港の人たち）がローカルを語る際に，（「南中国」の）香港人として，あるいは（「南中国」の）「広東語」話者としての世界観，または歴史（観）も持っているはずだと思うのです。

少なくとも「改革開放」以後の1990年代，香港の人たちが中国大陸に自分たちのふるさとを求め，自分探しのような行動が，一種のツーリズムとして流行します。しかし，こうした流れはこの10年ぐらいでほとんど聞かなくなりました。あるいは，私は広東省の歴史を勉強しているのですが，「広東人」と「香港人」との交流が，近年，私の目からはほとんど見えなくなっています。（そもそも，両者には）家族（宗族）的なつながりが（歴史的に）あるわけですが，こうしたものがあまりにも表面には出てこない。こうしたこと（従来の「南中国」での香港と大陸とのつながり）を，現在の香港社会では，どのように捉えられているのか，あるいは，埋没してしまっているのか，お考えやご見識があれば，お聞かせいただけま

せんでしょうか。以上です。

○若松：宮内先生，どうもありがとうございます。今の質問に対して，3点でお答えします。まず1点目です。中華人民共和国では1960年代ぐらいから現在に至るまで，国家や福建省政府が力を入れてナショナルな活動を実施しています。ナショナルな活動は恐らくは，台湾において90年代の初めごろまでに終わり，日本において第二次大戦後はまるで実施していないようです。

ちなみに，中華人民共和国でもナショナルでない活動もあるようです。（これについては，私のさきほどの発表で言及できませんでした。）宮内先生の詳しい，同族意識や同郷意識に基づく活動です。福建には宗親会のように，人々が中央政府や地方政府のイニシアティブではなく，家族や宗族のつながりに基づき活動しています。

次に2点目です。長崎平戸からの国際交流です。特に1994年の鄭成功生誕370年記念行事のしばらく後，2010年ごろから，平戸市と台南市が定期的に相互交流を始めます。鄭成功の誕生日の7月14日に平戸で生誕祭が，鄭成功の台湾上陸日の4月29日に台南で公祭があり，平戸と台南から関係者が相互に参加しあいます。最近は鄭芝龍の出身地である中国福建の南安の人々も平戸の生誕祭に参加しています。残念ながら，コロナ禍で，こうした行事は中止になっています。

ちなみに，平戸の生誕祭では，主催者が中国南安からの代表者と台湾からの代表者のあいさつ（スピーチ）の順番に苦慮したようです。結果として定着したのは，国交があるという理由で，式典では中華人民共和国の南安の代表者が先にあいさつを行います。ただし，前夜祭では，長らく交流のある台湾の代表者を尊重するようです。

最後に3点目です。平戸と台南の相互交流は，国家や地方自治体の主導するナショナルな活動ではなさそうです。確かに平戸も台南も地方自治体の協力を取り付けて，自らの活動にパブリックな性格を持たせようとしています。それでは，平戸と台南で，さらに福建の南安で，なぜ国際交流が進むのか。鄭成功をきっかけにして，人間関係を広げたり深めたりしたい，さらにビジネスチャンスをつかみたい，または海外旅行に行きたいという気持ちが，平戸と台南さらに南安の人々にあるからだろう，と私は感じております。以上になります。

○倉田：ご質問ありがとうございました。香港の人たちの広東省ないし広東人との関係性，広東語の問題ということかと思います。まず，広東語ですが，香港の人たちのアイデンティティーのかなりの部分を占めていると思います。先ほど香港のエスニック・マイノリティーの話をしましたが，彼らが広東語をしゃべれるかどうかが，香港人であるかどうかという時の，意識的，無意識的な判断基準になっているところはあると思います。ただ，だからといって広東語を話す広東省の人たちと心理的に近いかというと，そこは確かに微妙なところ

があります。2010年代以降，特に2014～2015年以降の香港の若い人たちの一部には，自分たちと中国大陸との関係性をあえて断ち切ろうとする傾向があります。そうした場合には，香港と大陸で広東語も異なるとされます。実際，違います。香港の人たちの広東語と広東省の人たちの広東語は聞いてわかるレベルでいろいろなところが違う。語彙（ごい）も違うし，若干話し方も違いますし，彼らは聞いてわかるわけです。そして，大陸の人たちの話す広東語はわれわれとは違うという方向にいってしまう。ただ，これは歴史的にずっとそうだったかというと，当然そうではありません。むしろ返還後を見ても，2007～2008年の頃というのは香港の人たちの対中国感情は非常に良かったです。北京オリンピックはかなり盛り上がりましたし，四川大地震の時は香港人はこぞって救援しました。緩やかな大陸とのつながりができつつあって，政治的な要求もそれほど先鋭的ではなかったです。でも，そこを経て，2010年代以降に急速に対大陸感情は悪くなっていきます。そこにはいろいろな要素があったわけですが，結果として，現在は，やはり大陸とは断絶したい，大陸とは違うということにアイデンティティーを持つ香港人は，ある程度の割合で，確かに存在しています。ですから，先ほど，菊池先生のお話で南中国としての歴史ということをおっしゃって，それは非常によくわかるし，そうであって欲しいと思う反面，なかなか今の香港の特に若い人たちとそういうことを話すこと自体が難しくなっているとも思います。今後，どうなるのかは分かりませんが，感情的な問題としても，現実的な問題としても，やはり現状では難しい。台湾とはまた違うと思いますが，やはり難しさを抱えていると思います。ありがとうございます。

○菊池：質問ありがとうございました。そうなんですよね。今お話しした内容，香港の場合と台湾の場合で大陸との距離感ってまた違うと思います。19年のデモ以来，もう徹底的に分断してしまったので，今修復って難しいだろうなって思います。ただ，僕自身も大陸のほうにいたので，その時のことを思い出してみると，もともと一方通行ではあった。というのは，香港のドラマを見たり，広州経由で香港の文化を広東全土，実際には広西のほうも見ているわけだけれども，香港のほうに大陸のことが伝わるかって，そんなに伝わらないんですよね。実は知らない状況がもともとあって，それが返還後，自分たちのアイデンティティーを探そうとした時にルーツとして少し広東のほうにさかのぼる目が向き始めた。あるいは，例えば四川の大地震の時に支援をするとか，香港の中でも大陸との一体感を模索する動きってあったんだけど，ここ10年間で決定的にそれは冷え込んでしまったんだと思います。19年の 8 月ぐらいにデモが激化した時に，大陸のほうも「これはとても受け入れられない」ってお互いに拒絶しちゃったというところがあったんじゃないかな。それが今も続いているんじゃないかなというふうに考えています。

○金丸：どうもありがとうございました。まだ時間若干ございますので，フロアの方，あるい

はZoomの方，いかがでしょうか。やはり現状について，われわれは様々な所で見てしまっています。その映像も特にここ数年間は若い人も含めて，みんな定点カメラ，スマホを持っていますので，さまざまな角度からの映像が飛び込んできます。そうすると，1個のカメラだけだったら，何か操作しているのかな編集・加工しているのかなといった疑念も出てくるかもしれませんが，それが本当に無数の眼球になって，そしていろいろなシーンを捉えています，それもまた編集されたものであり，うんぬんかんぬんと疑うべきだとの説が出るかも知れませんが，そうではないでしょう。おそらく「あ，これはリアルやな」という光景に接してしまっているので，どうしても冷静な判断が難しいような状況になっていると思うんです。

ただ本日，先生方お話ししてくださったような，過去の問題ですよね。過ぎ去った日々の問題。これに対しては私たち，だいぶ冷静に分析して，評価して，そしてお互いに批判し合うことが可能だと思います。ただ，過去の問題とはいえども，しかし本日の若松先生と倉田先生のお話は，非常に優れて現代に連なる諸々の構造を直接語ってはいないけれども実は雄弁に語っていた内容だったと思っております。対面だけで開催可能だったら，ざっくばらんにワイワイガヤガヤ意見をぶつけあいながら進められたと思うのですが，コロナウイルスの関係で不正常なつどいとなり，残念です。あとどれくらい続くのか正直，全然わかりません。それから学生さんなどでも授業をZoom配信すると教室に来なくなるという，現象がございます。しかし，これらも私たちに与えられたある種の時代の試みや苦杯なので，それにくじけることなく，小さい規模の研究所ではありますけども，本日のような活動を続けていきたいと思います。

○菊池：僕，実は台湾のほうの話がすごく面白かったので，一つお伺いしたいことがあって。一番印象的だったのが民族英雄としての鄭成功，これが2000年以降，陳水扁時代になってから認識台湾が教科書として採用されていく中で語れなくなったって，これ，非常に面白いなと思ったんです。民族の英雄というのは，これは中華民族だから，統一というのを前提にしていて，そうすると国府，あるいは国民党の主張としては成り立つんだけれども，そこに独立色の強い人たちは「民族の英雄」っていった時に受け入れられないという感覚を持ってしまう。そのことが鄭成功の地盤沈下につながったというところで面白いと思いました。ここからはどこまで答えていいかあれですが，実は僕の同級生で呉密察という台湾史の有名な研究者（台湾大学名誉教授，前国立故宮博物院院長）がいて，彼が当時，ちょうどその頃だと思いますが，台湾のテレビのインタビューに答えて，鄭成功について「彼は開国の英雄だ」と言ったんです。「国を開く」ですね。その時はふーんって思って聞いていましたが，今，今日のお話を伺って改めて考えてみると，その時の開国というのは民族の英雄といったらやはり統一を前提とした中華民国の系譜ってことになるんだけど，ここでいっている国は多分，

中華民国じゃないんですよ。彼がね。だから，鄭成功の位置付けというのも位置付け方次第でまた違う文脈で語られる得るかなというのをちょっと思いました。もしご意見がありましたら伺いたいです。

○若松：それでは菊地先生のコメントに対して補足いたします。それから，香港について私も質問いたします。

現代台湾における鄭成功の位置づけについては，菊池先生のおっしゃるとおりです。東西冷戦と国共内戦の重なる台湾で，鄭成功は外国の侵略者から台湾を奪還したという理由で，中華民族の英雄として位置づけられます。中華民族の英雄というイメージには，中国全体を統一すべきだという文脈があります。これとは異なり，台湾という島の歴史に大きな一頁を与えたという意味で，鄭成功は開国の英雄に位置付けられるのでしょう。開国の英雄というイメージには，台湾を一つの自律した主体に位置づけようという文脈があります。

さらに別の文脈があります。台湾の原住民の立場から見れば，鄭成功は外来の侵略者です。17世紀以来，漢民族，西欧人，日本人という外来者がどんどん台湾へ侵入してきて，原住民の生活圏を削り取り，台湾を好き勝手にして現在に至る，という歴史観が1980年代ごろから成立します。原住民にとっては，復台（台湾の回復）にせよ，開台にせよ，開国にせよ，どちらも漢民族による侵入であり，鄭成功がその象徴であるのならば，鄭成功は英雄でも何でもなくなります。つまり，鄭成功評価の地盤沈下が進みます。ここまでが菊池先生のコメントに対する補足です。

それから，私がぜひこの機会に，倉田先生と菊池先生に香港の歴史に関する質問を 2 ついたします。 1 つは，シンガポールを念頭に置く都市国家論という考え方があります。香港において都市国家論に基づき，香港の将来を描く人々が，現在どのようになっているのでしょうか。ローカルというキーワードが倉田先生の発表にたびたび登場しました。もともとあるネーションのうちで，ある部分が自らのローカルな色彩をどんどん強調していくと，その部分はそれだけで新たな一つのナショナルなものになるということもあり得ます。台湾ではそういうことがありました。

もう 1 つは，マカオ史というものがもし成立するならば，もしくはすでに成立しているのであれば，どのような内容なのでしょうか。菊池先生はコメンテーターとして，南中国の諸地域と比較しながら，香港史の特徴を議論していました。そこで，マカオ史なるものは香港史と類似性があるのかどうか。私からの質問 2 点です。

○金丸：どうしましょう。倉田先生から参りましょうか。菊池先生から？　どちらでも良いですよ。

○倉田：まず，私からお答えしますね。都市国家論に関連して言うと，この10年ぐらい，香港の中でも香港の将来，あり方に関していろいろな議論がありました。その中に一つ，都市国家論に近いものもありました。「城邦論」といいますが，大まかに言えば，香港をヨーロッパの都市国家になぞらえた議論です。ただ，「城邦論」は一国二制度下の香港が持つ自治を前提としていて，国家として独立するという方向の議論ではありませんでした。その後，特に2010年代半ば以降，香港独立論に近い議論も出てきましたが，それらは，あまり現実的なものとしては捉えられていません。やはり難しいです。実際に香港というあの土地がシンガポール的に国家として成り立つというのは，中国との関係を考えた時には有り得ないと思います。ただ，それを思考する人たちはいます。

先ほど，若松さんがおっしゃった，ローカルなものを突き詰めるとナショナルになるというのは，まさにそのとおりだと思います。香港ナショナリズムはまさに出現していて，香港民族論なんていう言葉が2014年あたりには登場しています。この場合の香港民族というのは，エスニック的に香港だけを切り離すのは難しいので，やはり都市市民として，アイデンティティーの面で香港という場所を前面に押し出した表現です。こういう意識の系譜は今に至るまで残っていると思います。香港は香港として，あるいは香港人は香港人としてありたいという気持は消えていませんし，遠い将来の選択肢として何らかの形で「香港」という地域が独自の地位を持っていて欲しい，そういう気持ちはどこかにあるように思いますね。

それから，マカオに関しては，もちろんマカオ史もあって，専門の先生もおられます。ただ，マカオは香港とはかなり違う面があって，ポルトガル植民地だった時から政治性がとても低い場所でした。大戦中も中立を保っていましたし。中国への返還も，香港のような政治的な問題をほとんど起こさずに返還されています。返還後も，同じ一国二制度と言いつつ，かなり中国共産党政権主導で政治過程が進んでいったので，ほとんど民主化運動も起きていません。なくはないのですが，でも，そういうものはあまり表立っていませんので，非常に優等生的に祖国に復帰した旧植民地だと言われています。ですので，植民地としての成り立ちも違うし，現在に至る経過も違うので，香港・マカオを一緒に論じることはなかなか難しいです。ただ，マカオをもはや大陸の一部として論じていいかというと，おそらくそうではないです。だから，マカオ史も実はきちんとやると面白いはずなのですが，なかなかできない。歴史史料の主要言語の一つがポルトガル語になるという問題もあって，マカオ史研究はハードルが高いのです。残念なのですが，そういう状況にあります。

○菊池：マカオは難しいと思います。中国の一部として史料の編さんから何から中国主導でやっているという現実がありますよね。今，ふっと思っていたのが，やはり台湾も含めて，これからどう向き合い，良くも悪くも心の中で共感を持って応援していくかという時に，彼らが動いている人たち，動いてきている，これからも動き続ける人たちだということを意識

することはすごく大事だと思います。現に香港ではむしろ外に出て行く中で動く歴史というのを大事にする，現在，研究者含めてという話が，今日，倉田先生の中でもありました。台湾については昔，台湾に行って彼らと話をして，台湾もひょっこりひょうたん島みたいに動けたらいいのにねって言ったことあります。実際にはいずれはマントルの関係で大陸に近寄っていって，日本を含めて地続きになってしまう運命なんですが。でも，やはりその中で動き回ったり，ある種自由な空間。すごく管理されたり統制されたりするのを嫌う文化というのが華南の持ち味だと僕，思っているので，そういうものを動き回る中で確保していく，自由な空間を求め続けるような，そういう努力をやはり僕たちは発見していくべきじゃないかなというふうに思っています。

○金丸：どうもありがとうございました。もう残りわずかですけれど，フロアの方，どなたかいかがでしょうか。なかなか振るわけにもまいりませんので。

本日，台湾のお話と香港のお話を伺っていて，例えば最近，台湾の場合でしたら，だいぶ多様性に立脚したような歴史観が出現しています。つまり，台湾に関わった人たちがみな台湾史の主人公だという捉え方です。そして，これは原住民の人々に始まり，客家の人が来たり，漢族の福建系の人が来たりの次元だけではなく，オランダ人や日本人更に戦後の「外省人」を含めて，かつて台湾の歴史を作る過程に参与した人たちが台湾の歴史の主人公だといった見解です。特定の民族が主役といった内容ではありません。そうすると，そこから敷衍が，現代においても，いわゆる新移民とか新新移民といいますか，そういった人たちの母語教育を，よくここまで先生をそろえるなというぐらい多様な言語，マレーシアやベトナムも含めて，小学校で行っています。そういう意味では，菊池先生が先ほどからおっしゃっている南中国という多様性を容認する，あるいは容認せざるを得ないエートスをそだてたのかと感じました。香港や台湾の自由や寛容への希求は，そのあたりにルーツがあるような印象を受けました。決して特定の民族や国家のもの，私のものだという考えではなくて，そこに関わり合った人々すべてが主人公になれるんだよと。だから今でも，原住民の人を含めて，少数者含めて，これは民族問題だけではなくて，トランスジェンダーを含めて，そういう人たちも表舞台へ出てきなさいというような，表現が難しいですけど，緩いやさしさがある。決して一つの権力がぎゅっと握って統合させるのではなくて，本当にいろいろなところにコアが複数あるような感じのイメージです。そうすると，もしかしてそういうのを意識していたら，われわれは多分，ほぼ全員が東洋史を若いに学びかつ，出発的にしている人間だと思います。東洋史＝中国史で，先ずは漢文史料を読んで思考せよとの教育を受けてまいりましたが，本日のシンポジウムで提示された論点を意識すると，もしかしたらこれから先新しい，希望が持てるような歴史的原体験の姿が見えてくるのかなという気もいたしました。

閉会挨拶

宮内　肇（立命館大学文学部 准教授）

○宮内：失礼します。閉会の辞ということで，大変，僭越ではございますが，最後にごあいさつをさせていただきます。

まず，４名の先生方，今日はお忙しいところ，大変に貴重なお話をいただき，ありがとうございました。

私はこの近くのキャンパス（びわこ・くさつキャンパス）ではないところに所属していますが，自身の専門上，授業で香港や台湾の話をしています。結構，学生は受講してくれるのですが，歴史の話になると，途端に睡眠学習を始めてしまいます。おそらく，ここに座ってらっしゃる先生方のなかにも同じような経験をされているのではないかと思いますが，だからこそ，歴史の意義や価値をいかに伝えるのかという強い危機意識を持っておられると思います。

今日の倉田先生のお話にもありましたが，歴史研究を通してこそ，香港の社会が見えてくるというのは，とても大切なことだと思います。鄭成功の研究が行き詰っているという若松先生のお話からは，確かに研究上では行き詰まっているのかもしれませんが，その行き詰まりの先に，新たな鄭成功の語りが生まれる可能性を感じました。つまり，鄭成功の歴史研究を押さえたうえで，初めてその価値が見えてくるわけです。そういう意味では実証的な歴史研究には，金丸先生が「開会の辞」にておっしゃったように，香港や台湾の現状を見た時には，感情的になりがちではあるけれども，やはり，そこに歴史的な目線，あるいは時間軸で香港や台湾で生きてきた人たちを見つめると，これまでとは異なる彼らの〈思い〉や，彼らに対する視座が現れてくる，大切な価値があるわけです。

そして，菊池先生の赤溪の土客械闘の事例などはまさにそうだと思います。彼らの語りにはフィクションがあるわけですが，他方で，彼らの語りを歴史的に分析し,「南中国」の人々が背負ってきた長い歴史を踏まえると，現在の香港や台湾という現状が，また新たな視野として広がっていく，そんな可能性を感じました。

とりとめもない話が過ぎ，失礼いたしました。それでは，シンポジウム「香港・台湾の来し方と私たちの行く末」をここで締めさせていただきたいと思います。あらためて，４名の先生方と金丸先生に感謝の意を込めて拍手を送り，閉会にしたいと思います。皆さま，本日はありがとうございました。